今は昔の百鬼夜行

神の筍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

空に流れる雲のように、草木を揺らす風のように、岩間を泳ぐ水のように。

今日も男はぬらりくらりと生きていく。

目次

今は昔、 1
男はふらふらと 9
幻想郷縁起。 19
男は閉じていた瞼を 29
深い森の中に 37
あの日は月が綺麗な 46
乗り込んできた 55
忽然と人が消える 63
鳶がーー 70
『百鬼夜行』 76
夕暮れを背に 79
どこか既視感を 85
日和ーー 95
珍しくバツの悪そうな 104
【終話】たゆう煙が 116

今は昔、

今は昔、日本には多くの妖怪ありき。

獣のごとき姿をする者もあらば、人型で角を持ちし者もありき。

その多くは人間を好み、時に食ひ、時に驚かし、時に酒を呑みき。皆一様に自在に生き、恋しきに驚きて寝て歌を奏づなる。

されど人間はさる妖怪どもを良くは思はず、討伐するために郎等を組みき。彼らは民草より陰陽師と呼ばれ、積極やうに妖怪を成敗しゆきき。

それを悪しかれと思ひし妖怪は、今まで一人で人間を襲へりが終ぞ人間と同ぜむ郎等を組みそめき。されど妖怪には人間に唯一敵わなありことありき。知恵なり。人間の持つ知恵のおかげで獣妖怪の類は瞬く間に駆逐されその姿を減らしき。

さて、妖怪はある妖怪を頼ることにせり。都より東の果ての果て、そこに自在気ままに生くる妖怪あり。ぬらりくらりと飄々に、原初の生き方を携えて、時に人間ををこにしつつ。

始めは小さき妖怪からなりき。

付喪神と呼ばるる妖怪の類、人間より隠るるために獣の姿をとりしもの、山奥に隠れゐし者に、すずろに訪れし者。

その妖怪の元には皆笑ひあへり。人型が笑ひで獣鳴く。小さき者はおのれを使ひ音を奏づ。

一年、十年、百年と経ちいつの間にかそなる妖怪の周りには常に百に及ぶ妖怪ありき。契りを交わしし者は百を超え、なにかあったら駆けつくる。さる言を置きて新しき生活に向かふ者もありき。

いつしかその妖怪はあらゆる妖怪のがり伝わり、人間の耳にも入るようになりき。

いたづらなる妖怪はその妖怪のがり向かひ、人間は妖怪がすだき報復すまじやと恐怖せり。

日がな人間は語り継ぎ、鉄の鳥の飛ぶ現代まで噂はありき。

満月の夜、雲間に隠れて妖行く。
月に照らされしその姿は百に及び、夜は彼らの刻なり。
努努な忘れそ、
――百鬼夜行が跋扈せむ

一、

幻想郷ーー妖怪と人間が共存し、時代に置き去りにされた古き場所。入り口はなく、出口もない。訪れるとすればそれは神の気まぐれか、管理者による悪戯であろう。
人里を中心に、北には天狗たちが住まう妖怪の山。東には魔法の森、さらに先へは博麗神社。南には迷いの竹林、越えれば太陽の花畑。西には鬱蒼とした自然が広がり、人里の狩猟区域もある。
春に桜を夏には緑、秋は肥えゆき冬場は寒く。元来、日本の四季も色濃くあり表情豊かな世界である。
そんな幻想郷の一外れ、玄武の沢と呼ばれる妖怪の山の麓。河童や怪魚、水生妖怪が多く住まう沢にその男はいた。
「ーーぬらりくらりと飄々に、尋ねて参るは人の家。酒を奪いて呑み歩き、俺が目指すは気まま道(みち)」
沢のほとりで釣り糸を垂らすは一人の男。
浴衣か着物か甚兵衛か、灰色の和装に紺色の法被を肩がけにしている。頭には立山笠を被っており、行き帰りに着るのか蓑が横に置かれている。
「ずいぶんと上機嫌だね旦那」
「当たり前よ。今こうやって青い空の下、糸を垂らして魚を待つだけで気分も良いってもんさ」
「でも毎日そうやってるよね？　飽きないの」
「飽きるもなにもやりたくてやってるわけじゃないからな。飽きるほど没頭しちゃいないということさ。それに魚は待てば来るんだ、一々

時間を気にしていちゃあ無駄だ」
「はぇ～、私にはわかんないや。私たちはあんまし魚食わないし。どっちかって言うと菜食主義」
「菜食主義？　べぇじたりあん、ってやつか」
「べじたりあん？　なにそれ」
「外の世界で野菜しか食わねえやつのことをべぇじたりあんって言うんだ。この国の言語じゃなくて、違う大陸の話だがな」
「さすが旦那は物知りだね。私は生まれたときからここにいたからわかんないや」
「興味はねえのか？　外に出て、広い世界で旅をしたいとか」
「んー、今のとこはないかなぁ。たしかに外の世界の技術は気になるけど、ここで自分のペースでゆっくりやるのもいいし。それにここにいりゃ旦那が旨い酒を持って来てくれるからね」
「うぉ、さっそく目ぇつけやがったな酒好き河童」
　にゃはは、と笑ったのは青髪が眩しい少女。河童妖怪、河城にとりだ。
　にとりは糸の横でぷかぷか浮いて男と話していたが、会話に一区切りうち男が座っていた岩へと登る。蓑をかさかさと弄ると中から瓶を取り出した。
「なんの酒？」
「それはなぁ、村からもらってきた酒名工が作った大吟醸酒『黄金山』。年一の祭りのときにつくるモンらしいが、まだ完全に発酵してないのを無理言ってもらってきた」
「もらってきたの？　旦那が？　あの人ん家に勝手に入ってくすねてくることに定評がある旦那が？」
「幻想郷の中じゃあ村が一つしかないからな。いくつかあるならそれでもいいけど、さすがに稀なモンを黙って持ってくるのは俺の流儀に反する」
「誇り高い大妖怪としての秩序ってやつ？」
「そんなもんじゃねえさ、義理と人情。渡世の掟。俺も人間の宴に勝手に参加して、なんだかんだ楽しませてもらったからな、その優しさ

を仇で返すことはしないさ。あとにとりが言ったように大妖怪の秩序なんかねえぞ、俺は気ままに生きるだけだからな」
「義理と人情、昔の妖怪が聞いたら呆れるだろうね」
「その昔の妖怪が俺だからな」
　そう言った瞬間竿先が大きく揺れた。糸が水面で数字を描くように泳ぎ、魚が逃げようとするのがわかる。男はうまく合わせて引くと、立ち上がって後ろに振りかぶった。
「おいしょっとっ、酒のつまみが釣れたな！」
　糸には三つの針が付いていた。その全てに鈍く輝きを放つ鮎が跳ねており、素早く拾うと網カゴに放った。
「にとり、酒を呑む前に火の準備だ。雑多はやっておくから木の枝を拾ってきてくれ」
「はいよー、一匹はそのまま置いておいてね。生で食べるから」
「あいよ、頼んだぞ」
「うぇーい」
　すでににとりの服は乾いているようで、森の中へと消えて言った。
　男は二匹の鮎に墨を塗った太めの竹串を肛門から刺すと石を拾い集める。輪のように囲み、にとりが帰ってくる合間適当な落ち葉と持ってきていた木屑を散らすと懐に入れていた煙管に火を付けた。一吹き二吹きと火を大きくすると、指先で叩くように火種を落とした。
「てかにとり、魚あんまし食わねえとか言いながら二匹食うつもりだな？」
　男は広がる火種を見ながら呟いた。

「あー美味しかった」
「塩と、檸檬を持ってきたのも正解だったな」
「その黄色いやつ酸っぱかったけどなかなかマッチしたね」
「だろう？　酒に入れても美味いって言ってたから今度は炭酸酒でも持ってこようか」

「炭酸酒なら冷えてなきゃいけないから私が持ってくるよ。最近発明した冷蔵箱があれば地面に埋めてなくても冷たいままなんだ」
「そりゃいいな。冷やしたいモンがあったらにとりのところに持ってくるか」
「旦那なら別に構わないよ！　私の発明は幻想郷一だからね！」
　そのあともにとりは語り出し、冷蔵箱がいかに凄いものなのかを語った。冷やす機能、コンパクトな形態、暖かい空気を入れない密閉空間、利便性、発明にかかった年月。男にとって専門用語を使われてもてんでわからないが、生きてきた年月が知識としてい堆積しなんとなく意味がわかる。それ以前に発明がどれだけ便利なものかを理解しているため楽しそうに話すにとりを中断するはずもなかった。
「そうだ！　旦那、今から見においでよ！　作ってから道具類は片付けたから今は人を入れても大丈夫なんだ」
　行こうよ行こうよと言わんばかりに腕を引っ張ってくるにとりに男は面白そうだと立ち上がる。竹水筒に水を汲み、まだじゃっかん赤くなっている火に水をかけると煙が上がる。輪になった石もそこらへんに転がし、砂をかけて足で慣らした。
　と、ちょうどそのとき空のほうから声がした。
「おぉ！　にとりに日和様！　こんなところで今日も酒盛りですか？」
　上を見上げた二人の先にいたのは頭襟に黒い羽、白のシャツに赤いミニスカート。烏天狗、射命丸文である。
「お、射命丸の嬢ちゃんじゃねえか」
「天狗の文屋が沢に来るなんて珍しいね」
「そういうあなたは河城にとり。カメラはお世話になってますよ！」
「私が発明したんだから当たり前だよ！　不調があればいつでもお任せ、文は特別に三回までは無料だよ」
「ありがとうございます！　……それでにとりと日和様はなにをしてたんですか？」
「いつも旦那が釣りをしているところに私がお世話になってね。毎回酒を持ってくるもんだから昼からお酒を呑んでるの」

「なに、それは羨まけしからんことですね。明日からは是非私もご同伴に預かりましょう」
「ああ、構わんよ。酒は大人数で呑むのが美味い。と言っちゃあ沢で呑むのは静かに駄弁りながら、が一番だかな」
「水の流れる音に風が草木を揺らす音、お腹は膨れませんがおつまみになりますね」
「お腹が膨れるおつまみは旦那が採ってくれるからそこは大丈夫」
「にとりは魚は食べんと言いながら二匹も食ったからな」
「な、それはあの鮎が美味いのが悪い！」
「なんだそれ。狡いなぁ」
「あやや、まさか二人がそこまで仲よかったのは意外ですね。それに日和様は天魔様と会っているときと様子が違われる……」
「んん？　そうか？　基本俺はいつもこんな感じだが、天魔が硬えからな。俺もそういう風に見えてんのかもしれん」
「て、天魔様を呼び捨てにできるのは一握りですよ……それこそ外の世界も含めて。八雲紫やその式、鬼の皆様に花畑の主人、その枠に入ってるだけで我々からしたら十分なんですが……」
　天狗は徹底的な階級社会だ。
　実力、知力、共に優秀な者が上に立ち、下の者は絶対服従である。妖怪の山を仕切るものとして生半可なことはできず、硬い掟に仕切られた組織は幻想郷では珍しく安定している。
「むむ、私も旦那のことを旦那と読んでるけど、親が日和のことを知ってて旦那呼びだけどなんでだろう？」
「にとりもですか？　天魔様が日和様と話すときに敬称を使うのでどんなすごい人なのかと考えますが思えば知りませんね……。それに私の父も日和様とは既知らしいですし」
「にとりの親といえば、湖南となふ子だろう？　嬢ちゃんのほうは元三羽烏、天魔に及ぼうかという実力を持った準大妖怪だな」
「我が父ながら大妖怪に並ぶとは如何なものか……今や発泡酒の呑みすぎで薄汚い姿になってますが……」
「うちの両親も上流に行って里に引きこもってるからね」

「あいつらとはお前らが生まれるより前、今みたいに酒を交わす仲だったからな。そのときは天魔は天魔じゃなかったし、河童も尻子玉を抜いてる時代だったから妖力が高かったのさ」
「答えになってないですよ〜！　新聞の題材にもなるでしょうし、日和様が何者か教えてください！」
「私も気になるぞー！」
「かかかっ、それは俺の口から言っちゃあつまらん。そうだなぁ……もし俺が何者かわかればなにかやろうじゃないか。嬢ちゃんは分かったら新聞に載せても良いぞ」
「お、それは面白そうですね！　調査中も一面埋まりますし、『謎の大妖怪、日和！　その正体に迫る！』。見出しはこれで決まりです！」
「ただし、誰かに直接答えになるようなことを聞くのはダメだ。つまらんからな」
「うーん、そうなれば私も沢から離れるときが来たか。聞き込みはあんまり得意じゃないんだけど」
「文屋としてこの挑戦は負けられませんね！　もちろん正々堂々挑ませてもらいますとも。時は金なり、さっそくですが私は聞き込みに行って来ます！」
「あ、ちょっと待って文。人里に行くならついでに連れてって」
「この問題を解決するライバルになるにとりですがそれくらいは構わないでしょう。三十秒で支度してください！　里までひとっ飛びです！」
「ちょ、三十秒は……というわけだからごめんね旦那！　私の家に来るのはまた今度！　絶対紹介するからっ」
　にとりはそう告げると河に飛び込んで行った。滝壺の裏側、洞穴に住処を作っているので水中から繋がっているのだろう。
　発明を見ることができないのは残念だが、また訪ねればいいかと男は思った。
「日和様……天魔様……にとりの両親とも認識がある」
　どうやら文は単語をまとめているようでメモ帳にペンを走らせている。

自分の正体がわかるまでに何日くらいかかるだろうかと思案しながら煙管を取り出した。
「その煙管もヒントになりますか？」
「これか？　……こりゃあ趣味だから特別なことはねえな」
「ですよねぇ……」
そんな文の言葉とともに、男が蒸した煙が薄くなりながら消えていった。

男はふらふらと

男はふらふらと人里を歩いていた。
街並みを行くのは昔よりも上等な服を着た商人や百姓。建物も木造建築ばかりではなく、壁は石を潰したより丈夫にするなど少しずつ進歩している。
幻想郷の管理者曰く、人間が外のように科学力を持てば取り返しのつかないことになる。故に、人間が持つ技術は見極めて、行き過ぎたものは排斥することになる。均衡を保つ妖怪たちが記憶を曖昧にし、その歴史を無くす。そうやってこの世界は存在している、と。
人間の成長は馬鹿にできないということは外の世界に生きてきた妖怪は痛いほど理解している。
「団子五本、二つはみたらしで」
「はいよ。残りは三色でいいかい？」
「構わんよ。この辺にお邪魔するぞ」
長柄の番傘で日陰が作られた椅子へと座る。長椅子になっており、昼間どきで団子屋に座る者はいないのか独占状態になっていた。
炭焼きにされたみたらしが香ばしい匂いを発し、辺り一面に溶けていく。
「おお、そう言えば知ってるかい？　この辺りに住んでた三郎さん家の息子、結婚するんだって」
「なにぃ？　あのちっこい坊主が結婚だと？」
「ちっこいって、あんたがこの店に来るようになって何年経ってると思ってるのさ。少なくとも私が子供の頃から見てるんだから……」
「ははは、いやさ。俺たちゃ妖怪は人間とは生きてる年月が違うからな。たかが十年や二十年じゃあ余程のことがない限り時間が過ぎたって感じないのさ」
「難儀なものだねえ妖怪も」
「難儀？　俺たちが？」
「ああ。だって短いが故に楽しめる時間が感じられないんだろう？

私たち人間よりかよっぽど生きて暇さね」
「確かに、確かにそうかも知れんな。考えたこともなかった」
「ま、妖怪には妖怪の生き方があるだろうから構わないがね」
「たりめえよ、こちとらここの団子屋を何代も食べてきてるんだぞ？
　それだけで十分楽しいってもんよ」
「はいはい、それはありがたいことだよ。……はい、三色にみたらし、代金はあとでいいよ」
「おおっと、それと適当に包んでくれるか？　三郎ん家の坊主が好きそうなやつを」
「わかったよ」
　団子屋の女将は平皿を男の隣に置くと、暖簾の奥へと消えてゆく。厨房は表から見える場所にあるが、包みは奥にしまってあるのだろう。そんな女将に目をくれず、男は団子を口に放り込んだ。
「初代は白団子、二代目は餡子を入れてたな、先代はみたらしを追加して、今は三色にみたらし。どんどん品数が増えていくな」
　男が団子が好きだった、というよりも人間が作るものが好きだった。食べ物、酒、町。先の女将が言うように、妖怪という種族は長命がゆえに疎い。今やらずに少しずつ後回しにして忘れている、なんてことはざらである。
「ーーまたここにいたのだな、日和」
「んぁ？　その声は九尾の狐か」
「今は紫様より藍という名前をもらっている、種族で呼ぶなといつも言ってるだろう？」
「すまんすまん。どうにも俺は式としてのお前が想像できなくてな、忘れてしまう」
「はぁ。その貧相な頭にわかりやすいよう教育してやろうか？」
「誰が貧相だ。今よりも昔を大切にする、人間らしいだろう？」
「お前は妖怪だ。人間の思考を持ってどうする」
「かかっ、まあいいじゃねえか。一本食うか？」
「いただこう」
　藍は男の隣に座ると団子を一本取る。

顔に出るような人物ではないが、尻尾がひょこひょこと動いているためお気に召したのだろう。かく言う男も、藍がこの団子屋に何度か訪れているのを知っていた。
「それで、なんで人里にいたんだ？」
「村の様子見と、紫様から守護者に対する定期報告を預かってな」
「慧音に？　大変だな、あいつも」
「あの半妖には私たちも感謝している。本来、里の守護など人間がやることだがタイミングの良いことに半分妖怪、半分人間がいた。妖怪と人間が暮らす幻想郷の人里にはありがたい存在だ。能力も管理という面では重宝するものだからな」
「それを自分から進んでやってるってのが驚きだ。そんな面倒な肩書き、俺にゃごめんだ」
「それをお前が言うのか？　今は昔とは言え日和も……いや、違うな。お前はあくまでも遊び友達だった、と言うんだろう？」
「おうさ。同じ釜の飯を食って、盃を交わして歌う。そんな仲間が昔はいたのさ」
「今も幻想郷にいる奴はたくさんいるだろう？　集まったりしないのか？」
「んん、どうだろうな。たまに歩いてりゃ会うような奴もいるが、基本的に挨拶するくらいだな。もっとも、俺が会わないというよりかは向こうが気を遣ってくれてんだろうけどな」
「そうか……ま、もう一度集まるようなことがあればさすがに紫様が出向くだろうな。悪さをするような性格じゃないのは知っているが、見逃せるようなものでもない」
　藍はいつの間にか出ていたお茶を一口飲んだ。
「天魔なんか今も酒盛りに誘ってくれるが、他のはなぁ。鬼共は地下に篭っちまったし。萃香とはまだ呑んでるが」
「そう言ってやるな。鬼もあれでいて悲しい種族だ。強すぎるが故に、寝首を掻くしか方法がなかったのだからな。認めたくはないが人間のほうが上手だった」
「くくく、面白い生き物よな。一が無理なら二を考え、二が無理なら一

と二を足して掛けて割って、想像もつかんことをやる。だからこそ見ていて飽きん」
「そういうところは紫様と似ているな。あの人は妖怪や人間もすべて愛おしく思っている」
「違うとこといえば、俺は没入することがないことだな。生き物はやがて死ぬ。明日死のうが百年後に死のうが変わりはしない。それが今日まで酒を呑んだ仲間としてもな」
　だが、と男は続けた。
「最近は、ここに来てからその気持ちもなんとなくわかる。ここの団子屋の味も、どこにでもいるような小妖怪も、今を生きている人間も、俺からしたらどれもが輝いて見える」
「お前……」
　妖怪を殺すのはなにか？　剣か、矢か、毒か、病か、寿命か、そのどれでも無い。妖怪を殺すのはーー時間である。肉体が朽ちる前に精神が枯れ、木のようになって腐り果てる。だからこそ妖怪は娯楽を見つけ興じ始める。
「それを見ているだけで楽しいさ。昔からそうだった。俺は酒を呑んで、濡れ縁から部屋で騒いでいる奴らを見るのが好きだった。でもな、たまには入りたくなることがある。音を奏でる付喪神と歌ったり、鬼と呑み比べを競ったり、来たばかりの妖怪にちょっかいをかけるんだ」
「……」
「バカな騒ぎを起こして、面を食らって怒った人間が札を持って攻めてくるんだ。てんやわんやに抗って、最後は笑って走って逃げる！女将には時間の流れが感じられないなんて言われたが、さすがに千年も前のこと懐かしく思う」
「戻りたいのか？　その時代へ。ここはつまらないか？」
「いやまったく、でも刺激が足らん。停滞している。まるで動物園だ！　……だから、刺激を起こそうと思う」
「まさか……！」
　藍は思わず立ち上がる。

「ああ、そうだ。藍が考えてる通りだ。――異変を起こす」
男は最後の団子を手に取る。子供のような笑みを浮かべ、横薙ぎに団子を一口で食べた。
「気ままに生きる大妖怪が起こす
――百鬼異変さ。
借りを返してもらうときが来たぞ、藍？」
「な、なんてことだ……」
こめかみを抑えるように頭を抱え、音を立てて座った。

一、

異変、と呼ばれる事態が幻想郷には八つあった。厳密には九つであるが、最初の一つは現在のルールに基づくものではなかったため割愛される。
一、紅霧異変
紅魔館と呼ばれる館に住まう吸血鬼を中心に紅霧を起こした。
二、春雪異変
白玉楼、亡霊の主人が春を奪い去った。
三、萃夢異変
太古より力の象徴とされた小さな鬼による終わらない日々。
四、永夜異変
月の民による策謀。月を隠した永い夜。
五、花映異変
外の世界の影響で幻想郷中に花が咲いた。
六、風神異変
新たに現れた神々による、妖怪の山を巻き込んだ出来事。
七、緋想異変
天に住まう人々により、気質が天候に現れた。
八、地霊異変

忌み嫌われ、地上に飽きた者たちが住まう地底より怨霊が解き放たれた。
その全ては人間と妖怪の均衡、中核を担う博麗の巫女によって解決された。一人だけではなく、時には仲間とも言える存在があった。
スペルカードと呼ばれる人間が妖怪と、妖怪が人間と、はたまた妖怪が博麗の巫女と戦えるように考案された方法によって決着がつけられた。
男は異変のたびに面白そうだと酒の肴にしていた。しかし、今回はそうではない。起こす側なのだ。
「久しぶりだな、マミゾウ」
「おお、おおっ、おお！　日和ではないか、久しぶりじゃな！」
男はまだ人里にいた。
その辺境、大通りに比べれば人の姿が疎らな場所。『二ッ岩金貸屋』と看板が挙げられた店だ。
声をかけると奥から女が出て来た。垣根色の洋服に赤茶のスカート。お尻には立派な一本の尻尾がある。辿るように頭を見ると獣耳もあった。
「元気そうで良かった。今は暇をしてるか？」
「全然問題ないぞ。どうせ人なんか来やせんのじゃ、お前が来たところで閉店じゃ！」
退いた退いたと端に追いやられ、マミゾウは手慣れた様子で看板を下ろす。座敷に座布団を投げ手招きをした。
「邪魔するぞ」
「うむ」
飛脚足袋に似た靴を脱ぎ座敷へと上がる。日当たりが悪いのか少し湿っとしており、畳に影が差していた。男がそう感じたことに気づいたのか、マミゾウは引き戸式の窓と雨戸を開け放った。
「開けるといい風が森から入ってくるのじゃがな、銭が舞うからいつも閉めておる」
頬を撫でるように風が吹く、同時に太陽の香りもする。
「ほう、陰気臭くなったと思ったがそうでもなさそうだ。元気にして

いたか？」
「あまり変わりはせん。変化と言えば外から幻想郷に流れ着いたことと、酒を呑む隣人がいなくなったことくらいじゃな」
「酒のほうは俺がいるから解決したな。またぞろいつか、上等な酒を呑もう」
「うむうむ。お主が持ってくる酒はいつも美味いからな。今からでも楽しみじゃ」
「宴会を開くのはいつも俺だったからな、美味い酒を用意するのは当たり前だ」
「ははっ、そうじゃな、そうじゃった。それで、今日はこうして世間話をしに来たわけじゃないだろう？　何用じゃ？　金を借りに来たわけでもあるまいし」
「ああ、最近平凡な時間が続いてるだろう？」
「ーー乗った、面白そうじゃ」
「えらく早い返事だな。今日は説明だけして帰ろうと思ったのによ」
「いや、儂も暇で仕方なくてな。異変、とやらの解決は博麗の巫女の仕事で儂ら妖怪、ましてや大妖怪は手出しはできぬ。つまらんしな。なにか起ころうかと待っておったがなにも起こらん、そんな最中に愉快な誘い。乗らなんだがつまらんて」
「おぉ、根は変わってないようだな佐渡の二ッ岩」
「くく、それはお主も同じじゃろう百鬼の主よ」
　どこか汚くげない表情を浮かべながら二人は話す。
「して、どのような異変じゃ？」
「おう。それはなーー」

二、

　男がマミゾウと談義している間、男から自分の正体を探すように言われた射命丸文は人里でにとりを降ろしたあと、そこで聞き込みは行

わずに博麗神社へて飛び立った。
「霊夢さーん、いらっしゃいますか！」
急な速さで砂埃を立てながら着地すると、賽銭箱の横に積まれた落ち葉が舞った。
「ーーくおらぁ！　バ烏天狗！　来るときはいつも風立てんなつってんでしょうが！　てか来んな！」
「ひ、ひぃ。あとで掃きますから今はご勘弁を！」
その音を聞き走り出て来たのは博麗神社の主、今代の巫女博麗霊夢。紅白の巫女服（？）を着こなしており、掃除中だったのかその上にエプロンと箒を持っている。
「別にいいわよ。で、なに？　あんたが来ると碌なことじゃないでしょ？　ちなみに取材は有料よ、お金を持って来なさい」
「あやや、さすがは強欲巫女。人里で恐れられているだけありますね……」
「ーーあぁ？」
「あ、いえ、なにも。はい……。んんっ、時間も惜しいので本題に入りましょう」
わざとらしく咳払いをするとメモとペンを取り出した。
「大したこと、でもないと言えばないんですが少々ご質問が……日和様の正体に繋がるようななにかを持ってらっしゃらないかと思いまして」
「日和？　妖怪？　そんな奴いたかしら……」
「あ、ほら。前回萃香様が起こした異変の際、萃香様と屋根の上で呑んでいた男妖怪の方ですよ」
「あー、なんかいたわね。誰かわからなくて紫に聞いた気がする」
「スキマ妖怪に!?　これは大ヒントな予感！　その内容を直接答えにならないくらいに教えてもらえないですか？」
「なにそれ面倒くさいわね。てか私も名前を聞いただけでどんな奴か知らないわよ。一応紫や藍たちと同じくらい長生きで……たしか東の生まれと言ってたかしら？」
「東、というと豊島郷辺りでしょうか……ぐぬぬ、都から東かどうなの

か微妙ですね」
「あー、たぶん外の世界の都からだと思うわよ。興味なかったから覚えてないけど、東の生まれっていうのは藍が言ってたことだから」
「ほうほう、八雲の式が。つまりそちらとも交友があったと」
　詳しくはあとでまとめるとして、文は旧所在地として有力な情報を掴んだ。東と西の妖怪は特色が大きくわかれ、東は組織的、西は単独的な者が多い。かく言う妖怪の山はもともと東にあった。ただし、それはあくまでも目安的なものであり『京妖怪』という妖怪の中ではブランド級で最上級の力を持つ妖怪たちが西では集まっていたりしていたため参考程度だ。
「や、でも妹紅も会ったことがあるとか言ってたわね」
「人里の不死人ですか？」
「そ。あいつが昔外の世界で祓い屋紛いのことをしてたら都で会ったって」
「東と思えば今度は都。有力な情報を掴んだと思えばますますわかりませんよ～！」
「知らないわよそんなこと。てかなんであんたがその妖怪のこと調べてるのよ」
「いや、実はですね……」
　文は調べることになった経緯と報酬を霊夢に話した。その際霊夢はなんでもだったら私も参加して一生分のご飯代たかろうかしらなんて漏らしていた。勘の鋭い霊夢が参加すればさすがに男も冷や汗を掻きそうである。
「ふぅん。ま、普段からのらりくらりしてるような妖怪みたいだから案外住処なんかないのかもね。もしかしたら人ん家に勝手に入って物色するような妖怪なのかもしれないわよ」
「そんなことあるわけないじゃないですか！　私たち妖怪の山の長、天魔様が敬称を使うくらいのお方ですよ！　そんな小物妖怪みたいなことして大妖怪になってみてください、今頃私なんて霊獣になってますよ！」
「なんであんたが霊獣になれるのよ。八咫烏に怒られるわよ」

「霊夢さんが変なこと言うからじゃないですか！」
「うるさいわねぇ、耳元で叫ばないでよ」
「うっ、すいません……ですが振り出しに戻ったような気が……」
「人里のほうがあいつを知ってる人は多そうだけどね。私もよく人里に行ったとき見るし」
「えぇ霊夢さん忘れてたんじゃないんですか？」
「忘れてたわよ。でもよく思い出せば確かにいろんなところで目に付くなって思っただけよ」
「いかんせん交友関係が広い方ですからね……」
「紫とはまるっきり逆ね」
　スキマ妖怪を貶しながら話す霊夢に文は苦笑いを浮かべた。そろそろ別の者に聴き込もうと別れの挨拶を口にしかけたとき、それに気付いた。
「霊夢さん」
「ん、なに？」
「萃香様は？」
「あー萃香……そう言われると最近姿を見てないわね。どこほっつき歩いてるのかしら」
「どれくらい見てないんですか？」
「二、三日ってところかしら。ま、あいつがいなければいないで勝手に食材とられなくて済むんだけどね」
「鬼にそんなこと言えるのは霊夢さんだけですよ……」
「いちいち気にしてないわよ」
　話す二人の視線は、いつも萃香が呑んでいる屋根の上に向けられていた。しかしそこには萃香の姿はあらず、ただ青空が広がっているのであった。

幻想郷縁起。

幻想郷縁起。

幻想郷発祥の折から記録され続けた歴史書。閻魔と契約し、魂を記録として何度も転生させることにより初代からただ一人が書き連ねている。姓を稗田、今代当主名を阿求。巷名を『幻想郷の記憶』。

人里の中でも一番の大屋敷、稗田家に河城にとりの姿はあった。

「やぁ阿求。縁起を見せてもらいにきたよ」

「河城にとり……河童のあなたが人里とは珍しいですね」

「最近は人里用の開発はしてないからね。たまに菓子処に寄るくらいさ」

友達、というほど関係はないが知り合いである二人は適当に世間話を済ませる。にとりは阿求に訪問理由を説明したが阿求が浮かべた表情は如何ともしがたいものだった。

「あの妖怪ですか……」

「む、なにかダメなところがあるのかい？」

「いえ……なにを知ろうとしてるのかはわかりませんが、あまり期待しないでくださいよ？」

「……？」

にとりは縁起が保管されている部屋へと案内され、いろは順に並べられている棚を探す。数多の妖怪が事細かく記されており部屋の全てが資料で埋まっていた。

「ーー姓は不明、ただの名を日和。博麗の巫女や、その協力者霧雨魔理沙。ある意味幻想郷は彼女たちを中心に回っていると言って過言はないです」

異変解決のスペシャリスト博麗霊夢。その相方とも言える人間、魔法使い霧雨魔理沙。異変、騒動の中心には必ず彼女たちが存在し、書物でいう主人公と準主人公ともいえるだろう。だが、それはあくまでも表の話だ。

「言うなれば博麗の巫女が出るまでもない事件。その騒動に彼がいる

ことがあります」
「旦那が……？」
「はい。ただやっていることは小妖怪と変わりません。付喪神である多々良小傘と人を驚かせたり、人家に隠れ入り酒を拝借して行ったりと微妙な感じですが……最後は慧音さんの頭突きによって成敗されています」
「あ、あはは。旦那らしいと言えば旦那らしい」
「そんなどこにでもいる妖怪ですが、彼の分類はーー」
大妖怪。阿求はそう仕分けされた棚から彼の資料を抜き取った。
「これが彼の資料です」
「おお、どうもどうも」
にとりは渡された資料を読もうとしたが逡巡する。
今思えば自分がやっていることは答えに直結するようなことではないだろうか？　しかしある程度危ない橋を渡らなければ正しい考察を出すことはできない。それに男は自分が何者か、と条件を付けていた。つまりそれはやったことは知ってもいい、ということだ。縁起を読むことはグレーゾーンな気もするが、あまりにも答えになりそうなものは条件を付けたときのようになにか言っているだろう。
「ふむふむ……
『???日和』
,,能力：???
住処：???
人間友好度：中
概要：いつ幻想郷に入ってきたのかは不明であり、それまでなにをしていたのかも不明。
管理者八雲紫によると彼女たちの代から生きている長寿であり、大妖怪に属していると思われる。また、交友関係も広く人里で八雲藍と食事を共にしていた、金貸屋の女主二ッ岩マミゾウと歩いているところを見たなど多数に渡る。他には酒店に伊吹萃香と訪れたなどの記録もあり、大妖怪に分類されることへの後押しにもなっている。
人間友好度：中、と記載したがおそらく平常的には高だと考えても

よい。人里でよく見られ、祭りにも参加して里の者と戯れているところが多数目撃されている。
中にした理由は、たまに小妖怪と人間に危害を加えることがあるからだ。
性格はいたって温厚であり、人里でも悪評は一切聞かなかった。
単独を好む（？）大妖怪と属される者たちと違い、小妖怪と行動を共にしていることが多い。
……旦那だね」
「ええ。正直彼のことはあまりわかりませんでした。能力もそうですが、何の妖怪なのかも。あなたと同じ河童や天狗のように多数妖怪なのか。それとも八雲紫や風見幽香のように単一妖怪か」
「んー、ほんとに旦那のことを知らないなぁ……」
にとりはいつも魚を分けてもらっていたにもかかわらず、どうして身の上話をしなかったのかと少し後悔した。
「鬼や妖怪の山の主人である天魔などを除き、大妖怪に分類される者は単一妖怪が多いです。おそらく彼もそうなのでしょうが情報が少ないため確定はできません」
「なるほど。これを見るに旦那のことを知りたければ大妖怪や小妖怪、極端な連中に聞くしかないのか」
「それは、どうですかね……九尾の狐に二ッ岩のマミゾウ。私もそう思い聞き込みに行きましたが語ることはありませんでした」
「小妖怪も？」
「はい。ただ、小妖怪は大妖怪とは違い本当に知らないようでした。ほとんどが幻想郷の中で生まれた者です、知らないのも仕方ないですが」
「うーん、一番のヒントだと思ったんだけどなぁ」
「私も知りたいくらいです。今、あの妖怪を調べている人はにとり以外に誰かいるんですか？」
「あー、今文と旦那の正体を探る勝負をしててね。旦那の満足のいく答えがあれば願いを一つ叶えてくれるんだ」
「射命丸文と。なるほど、でしたら是非情報が集まれば教えてもらえ

ますか？　力になれることがあるかもしれません、それに縁起にも付け足しておきたいので……」
「ああ。そんくらいのことなら構わないよ。協力者に阿求がいれば百人力さ」
ちゃっかり自分の利になるよう働いた阿求だが、にとりは全く問題ないといった様子で承諾した。今まで妖怪をまとめてきた、言わば専門家に意見がもらえるのだ。これほど心強いものはない。
「ありがとうございます」
と、阿求は返事を返す。
にとりはもう一度資料を読み返すようで、近くにある椅子へ座った。
その様子を見ながら阿求はふと思う。なぜ大妖怪たちは「日和という妖怪を語ろうとしなかったのか？」。語れない？　単純に知らない？　どれも違うだろう。聞き込みをしたとき、大妖怪は誰しもが知っていると答えた。八雲紫も、その式藍も、マミゾウも、天魔も、風見幽香も。最近現れた紅魔館の吸血鬼は別として、鬼すら語らなかった。
誰も語らない大妖怪。
何者なのか？
ただ、
「誰もが口を閉ざし、哀しい目を浮かべたのはどうしてなのでしょう？」
そこにはきっと答えがある。
いかな理由とは言えど、縁起に記さなければならない。それが、阿礼である。

一、

妖怪の山。

多くの種類の妖怪が住み、日夜騒がしい場所。そこは天狗によって支配、管理されており主に白狼天狗がその任を担う。烏天狗はなにをしているのかと言うと、麓を白狼天狗に任せることで自分たちは山頂側に住み、サボっている、というのが実情だ。しかし山の長である烏天狗の天魔には毎日多くの仕事が入ってくる。

「ふむ、河童から上流の活動域を広げたい、か。方法はガスを使い発火により一瞬で行う……？　そんなことできるわけないだろう。却下」

どん、と鈍い音を立てて否を意味する判子が押された。

「白狼天狗、哨戒任務を細分化して効率よく見廻りたい。空いた時間は各々休暇に充てたい。受理。烏天狗、新聞の……なんだこれは、却下」

一枚、二枚と処理していくが申請書の山に終わりは見えない。河童、天狗、はたまた人間からの入山許可。最近は神も降りてきて上から下にと板挟みが続いている。いい加減疲れたなぁと思いつつも止めることはできない。

「はぁ。しんどい、日和でも呼べればいいのだがな」

一言漏らした。

「ーー呼んだか？」

「ぬぉっ？」

乙女らしからぬ声をあげた天魔は奇異な物を見るよういきなり現れた男に視線を移した。

「なんだその目は、呼ばれたから来たって言うのによ？」

「嘘をつくな。最初から吾（われ）の社畜っぷりを見ていたのだろう？」

「かか、違いない。そうやって判を押し続ける仕事は俺には似合わんからな」

「吾も想像できん。して、日和から来るとは珍しいな」

「ああ。ずっと酒呑みに誘われてたからな。そろそろ行かねえとと思って来てやったんだ」

「おー？」

天魔は素っ頓狂な声を上げた。

それ見た男はからからと笑っているが、いまいち理解が追いつかな

かった。
「日和がか？」
「そうだぞ」
「うむ……熱などあるのではないか？」
「熱ぅ？　熱なんかこと方引いたことねえ。天才は病なんかに倒れんよ」
「天才じゃなく馬鹿だろうに」
「馬鹿と天才は紙一重って人間も言うだろ？　俺は天才の領分よ」
　はぁ、とまたもや声を上げる天魔に、男は知るもんかと近付いた。
「ほら、場所はもう用意してるんだ。仲間も増えてるから来い来い！」
「あ、待て！　吾はまだ仕事が……！」
「んなもん下の大天狗もできることだろう？　たまにゃ天魔とて休まなきゃ倒れるってもんだ。ほら、お一人様ご招待！」
「ぬ、ぬわぁー！」
　天魔は男に手を取られた瞬間、まるで空気に溶けるよう消えていく。またもや乙女とは言えないような声を上げ、やがて残ったのは誰もいない執務室。
　天魔がいなくなったのに気付くのはここからおよそ五時間後。無骨な男の字で『飽きた！』と書かれた紙が大天狗によって見つけられる頃だ。

　ところ変わって八雲藍。
　彼女は今、複雑な心境であった。
「藍ー、今日のお昼ご飯なにー？」
　その主人、八雲紫の声がかかる。
「……」
「藍ー？」
「……」
「どうしたのよ、藍？」
「うぉい!?　紫様どうしました!?」

「うぉい、って。変な声を上げてどうしたのよ……」
「あ、ああいえ。最近季節の変わり目で抜け毛が増えて来まして。どうしようかと考えて……」
「そう。それなら良いけど」
そそくさと台所に逃げると藍は思案する。紫はテレビの前を陣取っておかきを齧っている。
もちろん料理をする手は止めておらず、今日の昼ごはんの主役である魚を冷蔵庫より取り出した。慣れた手つきで鱗を取って開いていく。
「私が一時的とは言え離れたら紫様がどうなるかわからない」
衣を付けて卵に通す。今日は魚のフライに小鉢を少し、食後にマンゴーを出そうと思っている。
「外の世界にカップ麺を買いに行った方が良いか……？　しかし紫様にそんな見すぼらしい物を食べさせるわけにはいかない」
鍋に油を入れて着火する。温度が上がるまでに小鉢用の野菜を切っておこうとほうれん草をざく切りにしていく。
「いや、むしろ良い機会なのか……？　ここで少しの間お暇をもらい、紫様に自身の生活を見直してもらうチャンスだ」
龍脈を用い、幻想郷と外の世界を隔てる結界を張り続けている紫だが張り終わった後と言えば家でダラダラしているだけだ。むろん、それだけでも後世を遊びに惚けていても良いくらいなのだがいかんせん他の者たちに示しがつかない。最近では引きこもり妖怪、なんて不名誉な二つ名が付くほどだ。
「これではダメだ……！　寛大な紫様自身はきっと気にしていないだろう。だがやはり、紫様はどこにいても誰が語ろうとも偉大でなければならない！」
まずは生活習慣からだ。四時に寝て十一時に起きるような生活なんて以ての外。最近は肌に出て来たのか化粧も濃くなった気がする。
紫の能力は強大で、使う妖力はかなりの量になる。それでも自由に扱い、支障がないのは大妖怪たる所以。しかし最近は霊夢を驚かすためなどよくわからないことに使っている。娯楽に費やすのは妖怪と

して当然だが、そのせいで眠る時間が多くなるなど馬鹿馬鹿しい！
「今宵は紫様のことを思い、少し鬼にならさせていただきます……！」
式歴一〇〇〇年八雲藍。彼女は己の主人にバレぬよう、密かに決意を固めるのであった。

地底と呼ばれる場所が幻想郷には存在する。
人間から排斥された妖怪、さらにその妖怪からも嫌われた者たちが住まう最後の楽園。禁忌とされ、荒くれ者たちを仕切るのは古の強者、古来より妖怪の代名詞と呼ばれるーー鬼。
「おーい勇儀ー。どこにいるの？」
その首魁、酒呑童子こと伊吹萃香は悠々自適に地底世界を闊歩していた。
萃香の声を聞いて誰だと顔を向ける者もおり、その姿を見た住人は酒呑童子が帰ってきたと騒いでいる。
「萃香の姐さん、お久しぶりです！」
幾人かの鬼も頭を下げ、萃香に再会の挨拶をしている。気にしなくていい、と伝えつつ勇儀はどこにいるか尋ねると地霊殿に続く道の手前で酒盛りをしていたと聞いた。
「ありがとねー、また呑もう」
「へいっ、光栄です！」
小さな歩幅で歩いて行く。
萃香は以前、鬼が地底から出てこないかと思い異変を起こした。また昔のように呑み、騒ぎ、人間と喧嘩をするのだ。人里にはおもしろい人間が多い。先祖に退治屋でもいたのか能力を持って生まれてくる人間もいる。だからこそ、今なら鬼がいても楽しめるのではないかと？
結果としては霊夢に負け、その計画は頓挫したわけだがそれはそれで良かったと思っている。地底は地底で面白おかしく生きているのだから。
「勇儀ー！　いるかーい！」

路肩に布を敷き、何人かと集まった集団に声を掛ける。その中の女性にしてはひときわ大きい体躯、外の世界でいう体操着に、ロングスカートの女が反応した。
「おぉ！　萃香じゃないか……！」
かつて呼ばれた鬼の四天王、その一人星熊勇儀。単純な力比べなら一番強く、萃香に負けず劣らずの喧嘩好き。額にある星柄の入った立派な角が目立つ。
「この前ぶりだね、勇儀」
「ああ、そうだけど。大丈夫なのかい？　勝手にこっちに来て。地上から来たことがバレるとまたスキマ妖怪からドヤされるんじゃないの？」
「ん、いーのいーの。この前も異変でこっち来たし。今回も異変ってことでこっちに来たから」
「異変？」
「そ。ーー宴の誘いさ」

男は天魔を外に誘い出し、とある場所に連れ置いた。一体何がなんだかわからない様相ではあったが、先に来ていた妖怪たちに引っ張られ大座敷に消えて行った。酒気でいっぱいのそこはたくさんの料理も作られ、思い思いが騒いでいる。
男は濡れ縁と部屋の境界、風が入ってくる場所に脇息を置いた。
「天魔は連れて来たからあとは萃香に勇儀。藍ももうすぐ来るだろう。チビどももまだまだ集まるだろうから適当に飯を作ってどんちゃん騒ぎ」
煙管から出た煙が風に乗って流れていく。
「草の根も集まって、ここで会った知り合いもいるか。妖精なんて大陸の奴らもいるがそれもいい。……しかし茨木がいないのは盲点だったな」
お酒を飲んで気が抜けたのか、獣の姿になった二匹の狛犬が取っ付き合いをしている。それを見て回りの妖怪は笑い、後押しするように

手を叩く。
「ーーさて、八雲や博麗が気付くまでに何日かかるやら……」
今日もまた、青空には白い雲が広がっていた。

男は閉じていた瞼を

男は閉じていた瞼を開いた。
青い夜空に大きな三日月が照る、深淵の刻。騒いでいた妖怪たちはいつの間にか突っ伏したようで、虫たちの声が心地良い。
「痛てて、寝ちまってたか」
幻想郷はすでに秋口へと差しかかっている。夜は肌寒い空気が流れ、さすがに布団の中でないと身震いがする。少し肌蹴た着物を引っ張り適当に正す。酒か水か、なにか飲もうと思ったところで隣に杯が置かれた。
「眠るほど呑んでいたんだ、今は水を飲んでおけ」
「あー、ありがと。藍」
「お前が酔い潰れるなんて珍しいじゃないか。まだ異変を起こし始めて数日、これでは霊夢たちが気付く前に自然瓦解しそうだな」
「どうだろうな。俺が酒に呑まれるたぁ落ちぶれたもんよ。昔はそれこそ浴びるように呑んでいたのに今じゃあ鬼と呑んでこのたらく。百鬼の主が落ちぶれたってもんだ」
「はっ、なにを言っている。お前が落ちぶれたならここには集まっていないさ。ましてや鬼など一度決めたら己の意思であろうと曲げることはない。だがな、お前の元に来ている」
濡れ縁から中を見てみると、酒瓶を抱きしめながら寝ている萃香を勇儀が枕にしている。
「ありがたいこった。昔の縁と言えど一〇〇〇年を越えて果たしてくれる。年を取ろうと、時代が変わろうと、鬼のそこだけは変わらねぇ」
「鬼のそういう部分は最高位の妖獣と化した私と言え見習いたいものだ」
「ほぅ、昔はやんちゃしてた九尾がずいぶんと丸くなったな。杭を打たれてしおらしくなった」
「黙れ。私は別に他者からの介入によって今の形に収まったわけではない。私が、私自身がそうでありたかったから今があるんだ」

「かかかっ、そうかいそうかい。俺は昔のお前より今のお前さんのほうが好きだぞ？　昔のお前は、見ていて痛々しかった」
「……」
二度、裏切られた。
愛し、愛おし、愛いた人間に。
八雲藍になる前の、忘れてはいけない九尾の記憶。人ならざる人であった自身の記録。今では遠い、人間を愛していた時間。
「お前は……――私に似ていると思っていた」
「どこがだ？」
「人間を愛しているところだ」
間を置くことなく藍は言った。
「俺はそう思わなかった」
「私も昔は勘違いしていた。だが今は、なんとなくわかる」
男と藍の出会いは一〇〇〇年以上に遡る。
未だ日本が日本ではなく、日ノ本であった時代。天皇が真に現人神であり、神妖魔が跋扈していた頃。諸国巡遊と称し、男が全国各地を呑み歩きしてときに二人は出会った。否、藍が一方的に見ていたと言えるだろう。
「あのときはまさか、陰陽師がいるにもかかわらず平気で里に入る輩がいるとは思わなかったぞ」
「行きたいときに行き、見たいものを見るのが俺だからな」
ふとしたきっかけで藍は人間に興味を持ち、人間を盗み見るようになった。捕食対象ではなく、若さ故の好奇心と言うやつだ。妖怪である自身にはない人間だけが持つ道徳。そこに藍は惹かれていった。
「私の気持ちにもなってみろ。ふらふらと横を取り抜けた妖怪が、里に入って童に砂糖菓子を配っているんだ。あのときの驚きは、私の果てしない生の中でまだ勝るものはない」
「金平糖は今も昔も童にゃらには人気だからな。人里に入るには子供から抑えるのが効果的だ」
「はぁ……私が失敗して、お前が受け入れられる理由がわからん。一〇〇〇年前から、な。難題だ」

哀愁漂う顔貌で藍は月を眺めた。狐らしい細目は当時のことを思い出しているのか少し恨みがましく感じる。
「打算でやってたわけじゃねえけどな。ああいうのはいつの間にか輪に入ってるもんなんだよ」
気まぐれに吹いた風が芒にちょっかいをかけたとき、男は口を開いた。
「知ろうと思って近付けば、どんなものでも恥ずかしがって縮こまる。この国の人間は小心者だらけだからな。笑わそうと思って歩み寄れば、人は笑いながら受け入れるのさ」
「……なんだその論は」
「さぁな。適当適当。俺の言葉に意義なんてない。頭に浮かんだ文字をつなげて、それらしいことを発するだけ」
「そのいい加減さは直らんものだな。幻想郷に来て紫様は丸くなったと言ったが、最初からお前は丸かった。だがただの丸じゃなく、輪の中に丸がある」
「輪の中に丸？めんどくさそうな例えだなぁ」
「空洞の球の中にもう一つ球を入れれば揺れるように、日和は予想できない変化球を投げてくるということだ。現に、今だってそうだ」
「俺が異変を起こしたのが予想外かい？藍」
「ああ。私からすればお前は……なんというか、終わったと思っていた」
袖口に両手を入れながら藍は言を繋ぐ。
「団子屋で話すまでの日和はまるで寿命を待つ、種子を吐き終わった老木」
「かかかっ、子供はいないぞ？それにまだまだ現役だ」
「そういうことじゃない」
藍は衝撃が通るよう三本の尾で男の頭を叩いた。
「痛ぇ」
「紫様も私も、お前は消失すると予感した」
「……」
妖怪の死因は飽き。

件の団子屋で男は藍にそう語った。それは不死に匹敵する長寿を持つ大妖怪二人も理解しておりなにも言い返すことはない。そしてもう一つ、妖怪の圧倒的死の原因がある。それは、

忘れられることである。

外の世界の人間に、人が死ぬのは肉体的終わりを迎えたとき、または忘れられたときであると残した者がいた。それはあながち間違っていなく、人間ではなく妖怪でも当てはまることだ。

「鬼や藍に匹敵するほどの著名人だからな、俺は」

「妖怪は種で語られるが、名で語られることはない。私は九尾の狐という種から、紫様から藍という名を拝命した。その時点で妖怪として新たに生まれ直し、九尾の狐であると同時に式としての妖怪に再起した。それは鬼も同じで、鬼は自分に名をつけることで人間に近付こうとした」

妖怪の生態は自身もわからない。

天狗や河童、畜生に属するものは認知されている生物と比較的近い。しかし男や八雲紫、他の大妖怪の出生は誰も知らない。本人ですら把握していない。

「日和、幻想郷に来てからだろう？名を付けたのは」

「……まぁな」

「幻想郷の結界は、事実を曖昧に――反転させることで存在を保つ」

忘れられたものが集う楽園。

溝に捨てられたボールも、放り投げられた人形も、世間から爪弾きにされた人間も、誰にも覚えられていないものだけが辿り着く。

「そも未だ種として信仰されているお前が、名前を持たなかった日和が、ここに来れることはなかった。それこそ、自分を捨てなければ」

「そんな難しいこと言われてもわからんが、別に困ったようなことはなかったぞ。一〇〇〇年前なら文句の一つは言ったが、今は百鬼を率いているわけでもねぇ。守る必要のない今は、自衛さえできれば十分」

「……聞いていいか？」

「ん？なんだ」

「どこから取ったんだ、日和っていうのは」
「お、それを聞くかい？」
男はにやりと笑った。
「……む、尾を踏んだか」
「単純な話、人間が俺を表した言葉にこんなモンがある――『ぬらりとすり抜けひょんと浮く』。そこを文字って、意味も加えれば
――日和、悪くないだろ？」
特徴的な乾いた笑い声をあげた。
「ま、そんなもんだとは思ったさ」
むすっとした表情を浮かべて藍は息を吐いた。別に怒った感情があるとかではなく、ただただ呆れたのである。
「悪いな、日和。難しい話をした」
「別に難しくなかったけどな」
「自分で難しいって言ったじゃないか」
「言ってねぇ」
「言った」
「絶対言ってない」
「絶対言った」
「覚えてない」
「老害め」
「獣時代を考えれば藍のほうが……や、別にあんま変わらないか」
藍は緩くなった男の杯を掠め取る。身体を横にしていた男は浮ついた杯が藍の口によって空にされたのを眺めていた。
「俺の酒が……」
「また入れてやる」

一、

「休暇届……『おはようございます、紫様。事前に連絡しておらず申し

訳なく思いますが、本日より私は休暇を取らせてもらいます。結界等の作業は昨日をもって全て見直しており、紫様が対処すべき点は別用紙にまとめてあります。また、日の食事、雑務は橙に一任しております。ご迷惑を掛けることもあるでしょうが、式として成長できる良い機会だと考えております。

追伸、私がいないからと言って自堕落な生活はしないでください』

……」

午後一時だというにも関わらずパジャマを着た女妖怪――八雲紫は机に置かれた用紙を音読していた。初めは適当に目を通す程度だったのだが、一度黙読し、二度目で見間違えかと思い声に出した。

「藍……」

寝起きでぼさぼさの髪を手櫛で梳かしながら頭を働かす。半日寝ていた反動か、覚束ない意識だが大妖怪としての秩序がそれを擁する。必要な順次を脳内で箇条書きでまとめていく。

「まぁ、この際文句はいいわ。確かに最近は藍に任せきりなところがあったし」

季節は秋口。

八雲紫は強大な力ゆえに、その反動として長時間の休息が必要になる。自身が常に結界を張り続けている反動なのだが、それは仕方ないことなのだ。大妖怪の寿命からすれば雨露の如き時間だが冬場は冬眠するのだ。その間、春、夏、秋と藍二人で行っていることを紫がいないため藍一人任せになるのだ。にも関わらず紫は最近自堕落にかまけ藍に頼っていた。

ゆえに、そこを攻められると最悪冬眠ができない事態にもなるかもしれないため考えないことにした。

「式といえどそれは外の階級社会と変わらない。藍も休養が必要。でも今までは私が藍に暇を申付けるだけだった……つまり、今回は藍の意思が関係している」

だが、

「紙に書いて報告するだけ、なんてことはしない。藍は良くも悪くも生真面目、その証拠に結界の見回りと注視すべき点はまとめられてい

る。だから――藍に物言いできるだけの誰かが裏にいる。それも私ほどの存在が」
縁側から干してあった座布団を取り、畳において座った。
「新しい存在じゃないわね、ここ最近で新顔は入ってきてないし。かといって藍と仲良かった妖怪なんていたかしら？　それとも人間？　そんなはずないわね……」
こつこつこつ、と丁寧に手入れされた爪で卓面を叩く。めんどくさいタイミングで、めんどくさいことが起こったなぁと思案する。ただ博麗の巫女ではないが、なんとなく今回のコレは別段気にしなくても良い気がする。
「もしこれが異変なら霊夢に任せれば良いし……」
しかし妖怪としてコレを探しに行けば、楽しそうな祭囃子が聞こえてきそうだと頭の中でなにかが訴えてきているのだ。
「……一日で結界の点検終わらして、行けば良いか」
ふわぁと呑気なあくびをして八雲紫の一日は始まった。

人里には守護者と呼ばれる妖怪がいる。
その正体は厳密に言えば半妖であり、人間と妖怪を両親に持つワーハクタクである。名を上白沢慧音と持ち、白を基調にした青色のメッシュが目立つ美女だ。そんな彼女は人里の辺境『二ッ岩金貸屋』の前にいた。
「なんかおかしいことでもあったのか？　慧音」
「いや、杞憂だと思うのだがマミゾウ殿が居なくなってからやけに妖怪たちの姿を見なくてな」
慧音の隣にいた彼女――竹林の端に住む藤原妹紅が聞いた。
彼女は慧音と古い知り合いであり、見た目の少女のような姿からは思いもつかず、幻想郷の中でも古株の一人である。また、過去の因縁

により不老不死の薬を飲んでおりこの世でも類極まりない正真正銘の不死人である。
「人里的に良いことだろ、それ。この時期はよく妖怪が騒がしくなるって言って困ってたんだから」
「ああ、その通りなんだが……一年の中で月が一番大きくなるこの季節で妖怪を見ないのはおかしすぎる」
「ふーん」
「妹紅にはマミゾウ殿が見えなくなった、と言ったが賢者の式の姿も最近はないのだ。里のみんなに尋ねても「そういえば最近は来ていない」と答えるだけ。
　団子屋に私は把握していなかったのだが、正体不明の大妖怪が出入りしていたらしい。その者もまた見なくなったと」
「佐渡の狸に、九尾の狐。慧音も知らなかった大妖怪……ここまで力関係がはっきりしてるとなにか企んでるとしか思えないな。八雲紫が関わってるんじゃないの？」
「ふむ……それもあるかもしれないな。まずは霊夢に話を聞いてみよう。妹紅、すまないが私が神社に行っている間、里を頼めるか？」
「別にかまわないよ。これが異変の予兆だって言うのなら早めに行動するに過ぎたるはないし。私もちょうど暇してたからね、まかせて」
「ありがとう。じゃあ私は行ってくる、なるべく早く帰ってくる」
「ん、行ってらっしゃい」
　妹紅は紅白のモンペに突っ込んでいた手を抜いてひらひらと飛んでいく慧音に手を振った。慧音が帰ってくるまで時間があるだろう、任されたには大事なく果たすつもりだが適当に時間を潰せる場所を探すべく人里の中心へと歩いて行った。

深い森の中に

「――よう、茨木」

深い森の中にその山小屋はあった。

手作りで造ったであろう小屋は無骨ながらも生活しやすい形になっており、こだわりなのか扉の上の雨避け屋根は花で飾られている。

「あなたは……」

その小屋の主――名を茨木華扇。

「なんか……ずいぶんとこじんまりとしたとこに住んでんなぁ。昔のお前は事あるごとに俺に集ってたのに、意外だ」

遠くに滝でもあるのか、空気には十分な湿気がまとわれている。それでも風通しが良いためか不快には感じずさらさらとした木の葉が辺りに響いた。

「どうしてここに？」

「ん、昔の誼を集めて宴をしてんだ。萃香に星熊の、茨木の仲間もたくさんいるぞ」

「違います。あなたは、あなたは――外の世界にいたのではないのですか？」

「こっちに来てからは会ってなかったからな。知らないのも当然だが、一年くらい前にこっちに来たんだ。元々誘われてたのもあって、すんなり入れた」

「そう、ですか……では、あなたも知らないのは仕方ないですね」

顔を俯かせた華扇に男は怪訝そうな目をする。

「私はもう――鬼じゃなくなったのです」

華扇の言葉に危うく男は煙管を落として胡座をかいていた切り株から転げ落ちそうになった。なんとか動揺を表情だけに抑えて言った。

「そいつぁどういうことだ？」

「私の名前はただの茨木ではなく茨木華扇。鬼ではなく、仙人です」

「どうりで雰囲気が変わって探し辛いわけだ……」
――仙人。
東洋圏に伝わる功徳を積みし存在。あらゆる徳を収め、高次元の存在から認められた場合のみ元種族から昇華する形でなることができる。元来仙人とは生まれたときからなれる者が決まっているとされ、素質がない者が目指すのであれば一〇〇年を鍛錬に費やしても至れないと言われる。
「申し訳ありません、ぬーーいえ、今は日和と名乗っているのですね」
「いや、かまわんが。なんていうか、驚きだな」
「心境の変化です。あなたには伝えておきましょう、私なりの贖罪です」
「そうか。酒は呑めるんだろう？」
「ええ、それは大丈夫です」
「かかかっ、じゃあ行こうじゃないか！　祭囃子はもうなってるぞ、山に籠るのも良いがたまには騒いで見るのも楽しい」
「ダメなんです。私はもう、妖怪じゃなくなったので……あなたにはついていけない」
「そうか――」
「ごめんなさい……」
「かか、別に良いさ」
華扇の視界にいた男の身体が少しずつ曖昧になっていく。蒸した煙に解けるように、結ばれた紐を解くように弛ませて。
「お前のほうが辛そうな顔をしているのに、責めれば男が廃る」
色液を水に垂らしたように男の姿は見えなくなっていった。
『今度はお前から誘ってくれ、華扇』
「……ええ、必ず」

一、

「いいぞー!・やれやれっ、そこを叩くんだ!」
「おっ、行け行け!・俺はお前に賭けてるんだぞ!」
「げっげっげ、はよう足動かさんか!」
　幻想郷のどこか。未だ人が知らない場所で集った妖怪たちは三日三晩、はたまたそれ以上騒ぎ合っていた。日が登れば眠りにつき、月が見えれば起きて酒を呑む。どんちゃん騒ぎに声を出し、下品に茶碗を叩く者もいた。叩く、というのも正しいのか?・茶碗自ら箸を持って音を鳴らしていた。
「亀ぇ!・頑張れ!」
「兎は負けんな、主の方が速いぞ!」
　座敷から抜けた庭園では砂利の上で亀と兎が走っていた。およそ兎と亀と聞いて可愛らしい様相を浮かべるが、二体のその身は石で出来ていた。肌触りの悪い体躯は砂利道に筋を作りながら走って周りを沸かせた。
「儂が東北の野妖怪を束ねた悪路王よ。人に討たれたと言われるが、その身は未だに健在」
「ほぅ、お前さんがあの悪路王かい。鬼の中でもひときわデカくて黒いと思ったが、食ったら腹を壊しそうだ」
「うむ。じゃが汝は儂よりも強靭な畏を感じるぞ?・その身は幼子だが、内に秘めたるは山に岩を敷き詰めたようだ」
「あはは!・面白い例えをするねぇ。そうさ、お前が感じている畏は間違いじゃないさ、悪路王。私の名前は伊吹萃香」
「ぬっ、まさか」
「鬼名は酒呑童子。鬼神母神と謳われるモンさ!」
「ほーぅ、あの京の大妖怪も大妖怪。酒呑殿を目にかかれるとは来たかいがあるわ」
「いやぁ私も東北の鬼を見れるとはねぇ。どうだい悪路王。仮にも首魁を名乗る鬼が二人、力比べと行こうじゃないか!」
「望むところよ」
　酒呑童子に悪路王。鬼の代表格とも言える二人は配下の鬼を伴って裏山に跳んだ。その様子を見ていた妖怪たちは面白そうだとつい

ていき、当分は破砕音で寝れそうにないなと苦笑いした。
「あ、あのっ。九尾のお狐様ですよね？」
「ああ。幻想郷で九尾の狐といえば私だろうな。君は？」
「わ、私は豊後のほうで守り神を務めていた一尾の狐妖怪です！」
「若いのに守り神か。一尾にも関わらず立派なものじゃないか」
「九尾のお狐様にそう言われるとは……えへへ、実は九尾のお狐様は私たち妖獣の中では伝説の伝説だったのでいつかお話ししてみたいと思ったのです！」
「伝説か……悪くない響きだな。それにしても守り神に一尾、まるで仏道を歩くような姿。君はもしかして白蔵主か？」
「わぁ、お名前を知ってもらえてるなんて。ありがとうございます、九尾のお狐様！」
「なに、同じ妖獣だ。君のことは私もよく聞いた」
　白蔵主。そう指摘された女の子は被っていた白布を取った。容姿は完全に人型を取っている藍とは違い、鼻先から細い髭が伸びている。くりくりとした目、頭から伸びる尖った茶狐耳が特徴的だった。
「ね、ねぇ影狼。私たちみたいなものがここにいて良いのかしら……？」
「大丈夫だって。あの男も来いって言ってたしさ、付喪神もいるんだし問題ないよ」
「あの男は酔狂なことが好きだった。昔から小妖怪を束ねては、酒を呑んで肴を探して」
　幻想郷の人里に語られる妖怪はそう多くない。人里に住む民が知る幻想の地は、本来八雲紫が創った世界より限りなく小さなものである。世界の大きさを認識したとき、人里に住む民は自分たちの非力を思い知ることになる。元より妖怪を保護するために創ったこの世界は人里に優しくはなく、妖怪を活かすために人を入れたのだ。妖怪が人間に一方的な面だが、それでも八雲紫によって強制的に共依存の生態を取らされている。
　人里は妖の地が混じる半妖が守り、時折妖怪が襲い来る。持ちつ持たされつつの関係を偽っている。外の人間がこの世界を見れば、まる

で箱庭だと侮蔑するだろう。
「赤蛮奇はあの人を知ってるの？」
「うん。私は元々あの男の元にいたからね、だいたいはわかる」
「えぇー。赤蛮奇ってもしかしてすごい人？」
「別に。たまたまいたい場所にあの男がいただけ」
そう言いながら赤蛮奇――ろくろ首の彼女は朱髪の間から細長い瞳を、縁にて厭らしい笑みを浮かべながら酒を呑む男に向けた。
「鬼もやって来るなんて、あの妖怪何者なのかな？」
「うんうん、たしかに気になるな。たぶん、大妖怪なんだよ」
人魚――わかさぎ姫の言葉に、狼女――今泉影狼は自信ありげに頷いた。
「そんなことわかってるよ。もっと根本的なことっ！」
「え、んー？」
わかんないなぁ、と唸る影狼と頭を捻る（ひね）わかさぎ姫にどこからか持ってきた盃で喉を潤していた赤蛮奇が少し驚いたような表情を浮かべた。
「あんたたち、あいつのこと知らないの？」
「え……、もしかして有名な人？」
「嗅いだことない匂いだもん」
「呑気過ぎるでしょ……」
赤蛮奇は自身の髪を捻るように触った。
一言、紡ぐ。
「『――今は昔、日本には多くの妖怪ありき。』」
それはいつの日から、いつの時代から語られる妖怪たちの主の話。
「『皆一様に自在に生き、恋しきに驚きて寝て歌を奏づなる。』」
意気揚々と騒ぎ、妖怪らしく気ままに生きる。
「『ぬらりくらりと飄々に――』」
すり抜け浮いて、人を驚かす。
「『契りを交わしし者は百を超え』」
その男の周りには色々な妖怪がいた。
鬼も天狗も狐も付喪神も、皆一様に騒ぎ合っている。不意に拳が当

たれば喧騒が生まれ、争いが始まったら囲んで肴にする。そんな馬鹿らしくも、誰しもが羨む妖怪の一団。
『満月の夜、雲間に隠れて妖行く。
月に照らされしその姿は百に及び、夜は彼らの刻なり。』
赤蛮奇がまるで歌うようにその言葉を言った。二人は聞いていたが、なんのことだろうと首を傾げる。
「――百鬼夜行。さすがの二人もこれは聞いたことがあるでしょ？」
「うん……妖怪が集まる、って……」
「鬼とか、天狗とか……」
「今の状況、どう思う？」
わかさぎ姫と影狼は周りを見渡してみる。鬼の一座に三羽烏の準大妖怪。付喪神は辺りを走り回り、河童の集団は庭に備えられた池で水を吹いている。
「百鬼夜行の主。妖怪の総大将――それがあいつの正体さ」

二、

「――お酒の匂いがするわ」
ずず、と音を立てながら茶を飲んだ霊夢が呟いた。
さすがに肌寒くなって来たのか、火入れのされていない炬燵に座布団を敷いて入っている。
「なにかしら、このぼやっとした感じは……」
どこかでなにかが起きている。
煙を焚いたような感覚が頭の中に浮かぶ。解決すべきような、別に解決しなくても良いような感覚だ。もしこの勘（・）と言えるものが一大事ならば紫が起きて飛んで来るだろう。
「あー、あいつね」
卓に置いた茶の柱を、湯呑みを弾きながら揺らす。未来予知とでも断言しようか、博麗の巫女は今の感覚の犯人に目星を付けた。

考えるのは先日落ち葉を撒き散らしながら訪れた烏天狗。文は日和という妖怪について聞いて来た。つまり、そういうことなのだろう。
「どうしよっかなー」
たぶん今回もくだらないことだろう。というか、と霊夢は軽く憤る。
「そもそも、私は最近働きすぎなのよ。博麗の巫女で、この世界の調和を護ることはわかるけど、宴会の片付けなんてしなくてもいいじゃない。むしろ宴会に客として招かれて寝床も用意される立場。
基本的に妖怪を制圧するのが仕事で、なんならこの神社に使用人でも仕わせるのが普通じゃない？」
自身の体温で暖かくなった炬燵布団から出ようか出まいか。心地の良い環境を捨てたくないと思いつつも、別に異変の元を探し出しても良いと囁いている。
とりあえず急須が空になったら一考しようと思っていると、外から慌ただしく霊夢の名を呼ぶ声がした。
「おーい、霊夢ー！」
「うげ、この声は」
先の烏天狗同様、空から降りて来た者が一人。以前のように落ち葉は散らぬとも、砂埃が立った。
そして、地面に足をつけたのは金糸を黒高帽ーーそれは中世の魔女の装いをしたーーで留めた少女だった。
「なーに、魔理沙」
霧雨魔理沙。それが少女の名前である。人里にある霧雨道具店の一人娘であり、今は家出兼放蕩して自由に生きる自称「魔法使い」である。
「ーー異変だ！」
「わかってるわよ」
「行こうぜ！」
「どうしようか迷ってるの」
「紅魔館組はもう行ったぜ？」

「どうせレミリアが面白そうだとかで行ったんでしょう」
「図書館が閉まってたから暇！」
「はぁ……。ま、話の通じなさは今に始まったことじゃないわ。とりあえず上がって、お茶でも出してあげる」
「えー、お茶は別にいいけど異変の解決には行かないのか？」
「迷ってるのよ。さすがに悪霊や妖怪の山なんかが関わってると出るけど、今回の異変はいつか花が咲いたときや宴が繰り返される異変みたいな変な感じのものっぽいし」
「もうそこまで目星つけてるのかよ……」
「当たり前でしょ、楽園の巫女様よ。少ない情報を整理してやらなきゃ、めんどくさいってもんよ」
　霊夢らしいな、と魔理沙は言うと靴を脱いで縁側から上がった。箒を適当に払って床に置くともう一度口を開いた。
「人里周辺では妖怪を見なくなったらしい。二、三日に一度、柵を越えようとした小妖怪を夜警が対処してたけど最近ではそれもなくなったって慧音が言ってた」
「あら、良いじゃない。仕事が減るわ」
「で、それと同時期に、私は会ったことはないんだが里の端に住んでた二ツ岩マミゾウっていう化け狸の大妖怪が消えたらしいんだ」
「二ツ岩、マミゾウ……あー、いたわねそんなやつ。確か神格も持ってる化け物」
「慧音にそれを聞いたあと、里の人間に話を聞いていると一週間前ほどに藍が大量の食材を買い込んだ以来里に来てないらしい。
　さらに付け加えると、途中で会った文が『天魔様が消えた』って言ってた」
「藍に天魔、マミゾウって……どれもこれも大妖怪ね。……って、ちょっと待って」
　魔理沙はさきほどなんて言っただろうか。「藍が大量の食材を買い込んだ以来里に来ていない」――一週間ほど前に。そして、霊夢は知っていた。同時期ともいえる頃に消えた知り合いがいることを。
「そっちもかぁ」

あーあ、とやけになりながらも辻褄が合ってしまった。呑んだくれ鬼である萃香はどうやらそっちに加担してる故に最近姿を見せなかったらしい。以前の異変を起こした張本人であり、愉快なことが好きなぶん喜んで行くだろう。ましてや多くの大妖怪が関わっている。

行かない理由が見当たらない。

「ーーはぁ、仕方ないわね」

「お、その反応は」

「行くわよ、異変の解決にーー」

あの日は月が綺麗な

あの日は月が綺麗な刻(こく)だった。
妖怪である私にとっての月は、猫に当てた木天蓼だ。気が高ぶって、気ままに荒らしたくなるような、そんな気風。
薄が騒がしい、雲間から月明かりが射した平原。古を背景にあいつと出会った。
「なにしてるんだ、お前?」
『んん? おう、なんだ小さいの』
私の前に座っていたあいつの背中は、よくわからないが大きく見えた。たまに見る百年生きた畜生ほど体躯が大きいわけでもないのに、なんとなく相応しい「畏」があった。
これでも妖怪の一座を率いる手前、なんとなく威圧されたかのような雰囲気に苛ついた。
蛇が卵を食べるのに躊躇しないように、私は羽虫を払うようにあいつに手を出した。
「あれ……」
『おうおう、なにしやがるんだ。最近の京妖怪は頭が弱いのか? 人が風光を肴に一献傾けてるっていうのに手を出しやがった』
煙に刺したように男の体から私の腕は擦り抜けた。
しかしそれでも男は、文句を垂れているがこちらに見向きもしない。妖力を垂れ漏らしても危機感が無いのか、その顎先は相変わらず月を見ている。
「変な奴だな、お前」
『お前の方が変な奴だぞ、小さいの。ほら、こっちに座るといい。今夜はいつもより月が綺麗だ、月見酒と洒落込もう』
「む、私は酒虫で造ったモンか人の最穣酒でしか酔えないぞ!」
『かかかっ、随分高級な舌を持ってんだな! 安心しろ、今呑んでるのは郷から掻っ攫ってきた神酒の一つ。お前さんの舌でも満足して巻いちまうぞ』
「なっ、そんなモン呑んでるのかよ! 早く私にも寄越せっ」

『まだあるから落ち着け』
腰に付けていた瓢箪と盃を取る。瓢箪は酒虫で出来た酒が入っているが今は呑まない。
「はやくはやく！」
高原は月明かりのみで、盃に溜まって行く酒はきらきらと光っている。芳醇で上品な酒精特有の香りが鼻腔をついた。
もう呑んでいいか、と目で合図するとあいつはなにも言わずに頷いた。唇、舌、喉、そして胃に到達したのがわかるほどの熱さがあった。あまりの美味しさから、自分でも似合わないと思うほどの息が出た。
「美味い……」
『だろう？　神に捧げるってのも納得だ』
私とあいつはいつの間にか並んで座っていた。
私と、あいつと、自然を肴に酒は進んでいく。もう少しで酒が無くなるというところで、あいつは私の杯に残り全てを注いだ。
「良いのか？」
『おう。そろそろお暇しようとおもうからな。最後はお前さんにやるよ』
「どこに行くんだ？」
『さぁな。当て所ない旅を続けている、行き先は俺もわからんさ。次が会うときも、また月の綺麗な刻だ』
「な、名前はなんて言うんだ！　私の、私の名前は萃香！　京に響く大妖怪ーー酒呑童子とは私のことさ！」
初めてあいつの眉が上がった。
『ほぅ、あの手に付けられず崇められた存在がこんなちんまいとはなぁ。かかかっ、ああ不思議。ま、それもいい。俺の名前はーー』

「ははははっ、すげー！　どんどん入る！」
「がばごばぁ、ぶっ、べぶ、ずびぃがざま……！」
　座敷では天魔が萃香によって酒に溺れさせられていた。およそ人にし得る仕打ちではないが、さすが天狗の長。畳を汚すことなく呑んでいる。
「ぐぬぅ……天魔様があのような御姿を。だが萃香様の行いゆえ止められぬ……」
　三羽烏の一人は端でそれを見ていたが、止められない己を悔いていた。
「おい小さいの、あんま天魔を虐めてやんなよ。天魔は今、幻想郷と妖怪の山の板挟みで頑張ってるんだから労ってやれ。なぁ？」
「ぐはぁ。助けてくれるのはありがたいが、指差して笑っていのも知っているからな日和。覚えておけ」
「おー、怖い怖い。あのときの可愛い天魔ちゃんはどこに行ったんだろうな」
「うるさいっ、あのときは吾の気の迷いだ！」
「あのとき……？」
「よく聞け萃香。天魔はお前たちに攻めいられたときに一番に泣きついてきたのは俺なんだ」
「おー！　言うなと言っておろうがぁー！」
「ぐぇっ……！　首絞まってる！」
　押し倒した日和にマウントを取り着物ごと首を締める天魔。翼で太ももをちくちくと傷付けている。
　一時期は山に住んで配下だった天魔の、自分が知らない様相と、自分の知らないときに天魔と出会っていた日和になんとく苛ついた萃香は空の酒瓶を投げ付けた。じゃれ付く二人だが、もちろん適当なそれは大妖怪にあたることなく、手のひらに収めた日和が音も無く畳に置いた。
「投げることないだろう、萃香。瓶をそのまんまにしとけば八雲に怒られるからな」
「紫なんて今はどうでもいいのさ！　……それより日和っ、いつから

天魔と知り合いなんだよ！」
「いつから、だとぅ？　んー、まぁ、こいつが神通力を得る前からだからな。……お前さんと会った、四〇〇年くらい前、か」
「なっーーんだと！　おかしいだろ、なんでもっと早く私に会いに来なかったのさ！」
「な、なんでって言われてもな。元からお前さんに会いに行くつもりはあん時ゃまだ無かったからな」
「ぐぬぬ……」
『おお、あの酒呑童子が地団駄を踏んでおる』
『昔から、なにかと日和殿は騒ぎを持ってきておったからな』
『お、では今回も日和殿が原因かな？』
　面白そうだと付喪神や小妖怪がこちらを見ながら囁いていた。柱裏などでは気になるのか小狐たちが耳を覗かせながら聞いている。
「ーーこっち見てんなよ小物共！　踏み潰されたいか！」
『わわっ、こっちを見よった！』
『逃げろ逃げろ！』
『喰われたきゃなきゃ散れ！』
　慌て、それでも煽るように小妖怪たちは隙間に消えていった。座敷部屋は先ほどの喧騒は消えて大妖怪と、完全に潰れて半ば気絶するかのように寝ている者だけだ。
「ほら、そうまで怒るな」
「私は別に怒ってない！」
「どう見ても怒ってるじゃないか」
「気にくわないだけだ！」
　牙を剥いてこちらを睨みつける萃香にどうしたもんかと思案する。一応元凶の片方である天魔を見るが、萃香の様子を見たからか胡座をかいた日和の腰に隠れるように寝たふりをしていた。
　いつの間にかこちらを小さな体で何度も打ってくる拳を受け止めながら考えると、後ろから愉快そうな笑い声が聞こえた。
「あははっ、要するにあれだよ日和。萃香は妬いてんだよ」
　珍しい純色の金、外の世界のいわゆる体操着、そしてそれを押し上

げる豊満な肢体。手首には手枷のようなものを巻いている。そして、そんな個性的な姿よりも目立つのは星に似た柄を持つ、天まで伸びる赤い角。ーー鬼の四天王が一人、星熊勇儀。
「見た目はともかく私よりも長い年月鬼をやってるからね。そんじょそこらの妖怪よりも欲が深いのさ。気に入った酒があるなら誰よりも先に、たくさん飲みたいし。気に入った場所があるならば殺し合いをしてまでも奪いたい。鬼はそんな生き物だから、気に入った奴がいれば自分の目先にいて欲しいのさ」
「なに言ってんだよ勇儀！」
「私たち鬼は、知り合いである前に同胞だからね。それ以外で真に友達や知り合いと呼べるお前を萃香は大変気に入ってるんだよ」
　そう言いながら、どことなく男らしく隣に座ると祭儀用並みの杯に入れた酒を呑んだ。
「そうか、萃香お前さんは要するに寂しかったんだな」
「ち、違うしっ」
「かかっ、確かに。お前さんと会うときは話を聞くばかりで、自分の話はしなかったもんなぁ。そりゃ、少し不公平だ」
　日和は目の前にいた萃香の脇に手を入れ持ち上げると、父娘のように足に座らせた。勇儀が持ってきた瓶を攫い注ぎ直すと、一息吐いた。
「芸を見ながら酒を呑むのも良いが、今は話を肴に愉しもうか。俺が一〇〇〇年かけて見て知り合った妖怪たち。始まりは東の國から、北に参って西へと戻る。ぬらりくらりと巡遊した話ーー」
「ーーこの私に断りも入れず、ずいぶんと楽しそうなことをしてる

じゃないか」

「おお、どうやら客人のようだな」

一、

話し始める直前、鶴の墨画が動いていた襖が勢いよく開いた。
そこから現れたのは四人。一人は淡い青のような髪色にドレスを着た、旧約聖書にも記される大妖怪ーーレミリア・スカーレット。隣にいるのはメイド服を纏い、懐中時計を手首に巻いた従者ーー十六夜咲夜。目を丸くしながらこちらを覗くように後ろから眺めている中華服の門番ーー紅美鈴。そして最後は紫の髪を少し怠そうな目元まで垂らした魔女ーーパチュリー・ノーレッジである。幻想郷に住んでいるならば知らず者はいないとされる大妖怪、もしくは大妖怪に準ずるだけの力を持った紅魔館の一同である。わけあって当主、レミリアの妹ーーフランドール・スカーレットは来ていない。
いつのまにか、面白そうな雰囲気に惹かれた小妖怪たちが和楽器を手に雰囲気を作っている。空気へ溶けていくような篠笛と、これから始まる騒乱への道しるべへと言わんばかりに三味が弾かれる。
「ずいぶんと剣呑な気を持って来たな、娘っ子よ。錚々たりそうな面子で、なにしに参った」
「はんっ、私に断りも入れず妖怪一座を集めてると来た。かつて幻想郷に仇なそうと田舎妖怪を集めた私と同じことをしている奴がいる

んだ、見に来るのが当然」
「ほーぅ。お前さんも百鬼を率いたことがあったのか。かかかっ！
これは稀有。萃香、勇儀、天魔。お前さんらはあいつを知ってるのか？」
「ああ、湖の近くに居を置く妖怪だろう？　宴会で何度か会ったことはあるよ」
「私は無いな。いつか大陸の妖怪と拳を交えたかったんだ」
「うむ、確かに彼奴は幻想郷を支配しようと妖怪を集めたことがあったの。だが……畜生や外道から来た妖怪とも呼べぬ獣だったと記憶しておる」
「ほうほう……」
「ふん、新参の妖怪風情が。高潔たるヴァンパイアの私に挨拶も無しか。島に住む田舎者はよほど礼儀知らずに思えるな」
幼き吸血鬼が牙を剥く。
幼姿といえど内に秘めたる力は幻想郷屈指。大陸にて神に仇なす存在として語られるレミリアの畏が辺りを包んだ。そこには普段見せる悪戯好きな少女ではなく、一大勢力――紅魔の主人としての姿があった。
「ああ、そうだ思い出した。……萃香の言った通り、お前さんは湖の先に住む館の妖怪だな？」
それに相対す男に焦りの表情はない。力が分からぬほど愚かではなく、ただ前から圧する力を飄々としている。集まった紅魔館の仲間たちはレミリアの様子に「また始まった」と言った顔をしており、唯一従者は睨めつけるような瞳を男に向ける。
「うぁんぱいあ、ってなんだ？」
「なに、お前は私たちを知らないのか？」
「ああ、いかんせん俺は大陸には疎くてな。もんすたー、ってのに属するのかい？」
「……！」
「お嬢様を畜生の面々と並べるなど、愚か者が……」
紅い魔力が奔流する。レミリアを中心に砂塵のように舞う魔力は

可視化されその強大さを思い知る。小さな掌を空間に翳すと、紅い槍が具現した。
「槍か」
「腕の一本は散らして、お前の血を綴らせてもらおうか」
「……別に良いが、ここで暴れるのはよしたほうが良いぞ」
「なにを」
「ああいや。俺はかまわんが、ここは宴の席。異変解決といえど酒をひっくり返されたら敵わんだろう?」
「ふん、そこにいる鬼や天狗などはいざ知らず小妖怪の十や二十、私の敵にもならん」
「かかかっ。小妖怪の十や二十、本当にそう思っているのか……?」
男はおもしろそうに喉を鳴らした。
レミリアが畳を踏んだ時にも聞こえて来た祭囃子のような音楽、今やそれは全て消えて秋の虫だけが耳に残る。
「一体なにが――」
小妖怪。レミリアが呼んだその者たちの顔は酔狂が消え、ただ一様にレミリアを見つめる。無機物が占めた異様な雰囲気に蹴落とされそうになるが大妖怪としての秩序がそれを許さない。
「見た目だけで判断してはいかんぞ、娘っ子。ここにいるモンはすべて昔から俺と騒ぎあった者たち。日ノ本は万物すべてに神が宿ると謂れるように、こいつらにも神が宿る。お前さんが神に仇なすと自称するのはかまわんが、本当に信仰を持った神と対峙したとき――お前さんはどうする?」
「そんな、もの……!　しょせん数ある神、相手になるわけないだろう!」
「かっかっかっ!元気が良いな、それは良い!だが呑みの席で血を見れば騒げるが無粋。外に行こうか!」
男は煙管を懐に仕舞うと二度拍手した。すると示し合わせたようにレミリアの背後も含めた二方向の襖が開いた。それに合わせて、仕方ないかと萃香と勇儀は立ち上がった。
「すまんなレミリア・スカーレット。今回私はこっち側なんだ」

「なにやら幼子が暴れていると見える。儂も最近は動いてなかったからの、相手になろう」
「日和の言った通り芸の席で暴れるのはおもしろくないぞ、血吸いの童」
「いやぁ、念願が叶うとはな。やっぱ来てよかったわ」
相対するは四人の大妖怪。
神使に匹敵すると言われる最高位の妖獣である八雲藍。地域では信仰され神格も保持している二ッ岩マミゾウ。鬼神母神、日本随一の異名を誇る伊吹萃香。細腕ながらも山を破り谷を埋める力は怪力乱神と評された星熊勇儀。
国でも滅ぼしに行くのかという連名がレミリアの前にはいた。
「あー……たしかこういうのをなんて言うんだったかなぁ」
いまいち横文字言葉を思い出せない男は唸っている。
レミリアは最初からいた二人と、まさかまだ大妖怪が現れるのかと男に悟られないように内心驚く。それに、八雲の従者も加わっている。殺し合うような行為は起こらないが、敵地にど真ん中。我ながらバカなことをしたと叱責したくなる。
「そうだそうだ、思い出した」
男はぽんと右手を打ち付けた。
「――ぼすらっしゅ」
このあとめちゃくちゃ蹂躙された。

乗り込んできた

『これはこれは、人外の王と名高い吸血鬼が……』
『くふふ、おもしろい』
「お嬢様……ああ、おいたわしや」
「くっ、くく。レミリア、意外と似合ってるじゃない」
「あははー、なんというか白い肌にマッチしてるというか」
「くっ、覚えておきなさいよあの野郎。あとそこの小妖怪どもっ、笑うな！」
『肉と描いてやろう、あと目の周りに大きな丸もな』
『見ろ、こっちの鳥はなかなかだ』

乗り込んできたレミリアはさすがにあの面子に勝つことはできず、紅魔館の他の面々共々一旦屋敷に駐留することとなった。ただ、レミリアの妹であるフランがまだ紅魔館で妖精といった友達と遊んでいるらしく、食事等の準備があるため従者である咲夜の出入りは自由にしている。そして、門番である美鈴は朝方には帰ると。

今回の異変は変に禍根残す必要はなく、むしろそういったことは避けたい。無理に捕らえる必要もなく出て行ってもらっても構わないのだが乗り込んでやられた手前、のうのうと帰って解決もせず妹に会うのが嫌だとはレミリア談である。

「やぁ、そうしておったら見た目通りの童じゃな。大陸の娘っ子は見慣れておらなんだ、なかなかにめんこい」
「妖怪に容姿は問わねえと言うが、それでも和風と洋風の差はあるからな。ましてや大陸で名を馳せた吸血鬼」
「人形遊びにはちょうど良さそうだ」

と、いうのはマミゾウだ。彼女曰く運動、が終わった後萃香は人里に酒をくすねに、勇儀は眠たくなったのか適当なところから布団を引っ張り出して眠っている。藍は紫から離れているとはいえ、幻想郷の準管理者としての仕事もあるため、珍しくこちら側の方角に来たため辺りの様子を見てくると散歩に出た。天魔もさすがに鬼に弄ばれるのは堪えたのか、畳で横になっている。
「ねぇ、結局こんなに妖怪を集めてなにが目的なのよ」
「目的、か？」
家鳴りを起こす逆柱にぐるぐる巻きにされたレミリアが日和に問うた。
「ええ。あなたの様子を見てると、別に幻想郷を支配するつもりで手下を集めてるわけじゃないんでしょ？　それにもしそうならあの狐が加担するとは思えないし。ましてやここまでの大妖怪の数。妖怪は歳を重ねればそれだけ力も上がり知能も上がる。大妖怪なら大妖怪で幻想郷の必要性は理解しているからことさらそれは無くなる」
「おお、そうだな」
「で、あの酒呑童子みたいにただ宴会をしたいだけにしては、やけに妖怪しかいない。あなたが人外至上主義者のような性格であれば別だけど、咲夜から聞いた里での様子からそうは思わない」
「たまたま俺が妖怪だけを集めたかった、ていうのは駄目なのか？」
「それも考えた……。でも、確証は無いけれど、なんて言うんでしょうね。なんとなく、ここにいる妖怪たちは、なにかをーー待っている気がする」
日和から目を離し、座敷を抜け庭先で遊ぶ獣妖怪を眺めながらレミリアはそう言った。
「かかかっ、なるほど。見た目や先の猪突猛進な言動から持ち上げられた娘っ子かと思ったが俺の勘違いだったか」
「む、なによそれ」
「まあまあ不貞腐れるなレミリア・スカーレット」
そのとき日和は初めてレミリアの名前を呼んだ。
「お前さんの予想はあってるよ。ここにいる奴らはみな、来るべきに

備えてるのさ。俺は今異変を起こしてる正体だが、厳密に言えば俺はまだ異変を起こしてすらない。その準備をしているだけだ。俺が本当に異変を起こすとき、それは……今日よりも月が綺麗で、雲間に人が恐怖を覚えるときだ」

少し欠けた月を手のひらに乗せながら日和は言った。

にやにやと悪戯小僧のように、だが妖怪らしく笑う日和にレミリアはほんの少しだけ畏を感じた。魔の象徴たる己は血も力も他に比肩されぬものを持つ。だが、そんな彼女でも思い起こされてしまう。かつて多勢の怪物を背に欧州を跋扈したあらゆる人外の王であった父の背中を幻視する。

「ーーそうか、まさかお前は」

『はぁ、まったく。どこぞの真似かわからないけれど、百鬼を率いようとするなんて片腹痛いわよ。ましてや片手で払うことすら必要のない有象無象、あいつに比べたらまだまだひよっこね』

過去、レミリアと相対した幻想郷管理者ーー八雲紫の言葉を思い出す。

「八雲紫が言っていたあいつか……！

一〇〇〇年を越える国の、負債を払うが如く現れた妖怪。やがて衰退を辿ることになるが最盛期で名を轟かせた大妖怪ーー。百の妖を従えし姿は雲間に揺れ、陰陽道に付すものすら慄き軒下に隠れたと言われたーー」

「かっかっかっ！　よもやお前さんにも名前が知られとるとはな。この俺もまだまだ捨てたもんじゃねえな」

「いつまで経っても元気じゃな、お主は」

「ぬーー」

「そうだそうだ。

百鬼夜行の主、またや妖怪の総大将ーーーーぬらりひょんとは俺のことさ」

レミリアが言うが早く、日和ーーぬらりひょんは愉快そうに笑った。

一、

「なるほどなるほど。ではにとりさんの情報も直接手掛かりに繋がりそうなものは無し、と」
「やっぱり旦那は幻想郷に直接関わるようなことはしていないみたいだね。人里に何度か話を聞いたけど、妖怪らしいことも脅かすことくらいだって」
「ぐぬぬ、なんて小物臭」
　日和から正体について問題を出された文とにとりは人里にて情報交換を行っていた。数日前に沢から出る直前、ライバルなどと言っていた文だがいつのまにか協力関係に変わっておりここ二、三日はこうして川沿いの並木道にて話し合っている。
「霊夢さんも見たことはあるけど話したことはないって感じですからねぇ。まったく、さすがの文屋も単一妖怪の正体まではわかりません！」
「だよねぇ。八雲紫や風見幽香みたいな未だ種族名がわからない系だったらお手上げかな」
「ですね。まあ、さすがにそんな問題は出しませんでしょうし。きっと私たちにもわかるような方なのでしょう」
「そこは旦那を信じるしかないね」
「ええ」
「ーーあら、私がどうかしたのかしら？」
「ん？」
「え？」

話し合っていた二人に冷ややかな空気が流れる。声がしたのは文から見て右、にとりから見て左だ。互いに目を合わせたまま沈黙が走った。別に無闇矢鱈と殺戮を繰り返す声主ではないと知っているが、勝手に名前を出してさらにそれを聞かれたという罪悪感からかどちらも向きづらい状況に陥った。
「私が話しかけているのに、返事もないの？」
「いえ、そんなことはありませんよ幽香さん！」
「わ、わぁ。初めて見るなぁ……」
そこにいたのは先ほど会話で出てきたーー風見幽香。赤いチェックの装いが目立つ、鮮やかな緑髪を持つ麗人だ。背丈は並みの男より少し大きいといったところ、線は細いが出ているところは出ている女性らしい体つきだ。
「久しぶりね、文。そちらの河童は初めてね」
「お、お久しぶりです幽香さん」
「は、初めまして沢に住む河童のにとりと言います」
「きちんと挨拶ができる子は好きよ。それで、私と八雲紫がどうかしたの？」
「む、それはですねぇ……」
思わぬ人物と出会ってしまったが、文とにとりは今までの事情を説明した。
立ち位置的には大妖怪に属し、幻想郷のパワーバランスを担う最上級の存在。彼女ならばなにか手がかりとなるものを聞けるのではないかと打算的な部分もある。自分たちが調べたことも含めて話すと、幽香の切れ長の瞳が薄く伸びた。
「へぇ、そう。面白そうなことをしているじゃない」
二人は虎の尾を踏んだわけではないが、なにかしてしまった気が否めない。
「それで、その日和という妖怪はどこにいるのかしら？」
（申し訳ありません日和様。どうやら厄介なことになりそうです。でも私は大丈夫だって信じてますからねっ）
「いやぁ、それが日和の旦那は午前は沢で釣りをしていたんだけど、最

近はまったく来なくて、です……」
「そんな妖怪人里で見たことあったかしら。まあいいわ。ちょうど最近は時間を持て余していたし、気を紛らわせる暇つぶしになりそうだわ」
「と、いうことは幽香さんも……？」
「ええ、私も正体を探ってみるわ」
「おお！　あの花畑の主人が味方とは百人力だ！」
「よーし、ここに日和様の正体を探る会を発足しますよ。おー！」
「おー！」
「まったく。あまり頼りにしないでちょうだいよ、私もそこまで頭を使う気は無いし」
　巻雲が広がった秋空の下、本人知らずの謎の会が結成された。文とにとりが思わぬ成果に気をよくする横で、幽香は自身の髪を指先で弄っていた。
「……小妖怪と戯れる大妖怪、ねえ」

二、

妖怪を見なくなった。
その事実を知った慧音は博麗神社へとやってきていた。
人里では夜道を歩いても問題なくなった、と笑っているが「妖怪がいない」という事態は守護者たる慧音にとっては大きな懸念がある。人間にとって捕食たるーー知能がない畜生や獣風情ーー行為をしてくる妖怪がいないのは構わないが、今回は自身の力が遠く及ばない大妖怪の姿が見えない。管理者の式神である八雲藍がいない今、相応のことが起こっていると考えても良いだろう。半妖である慧音だからこそ特にわかるのは、妖怪は良くも悪くも人間がいなければ生きることができない。本来人を化かして生きてきた生き物だ、唯一人間がい

る人里周辺でその影を見ないのは異常なことだ。
「いてくれれば良いのだがな」
　もし仮に、外部からの干渉によって抑えられているのならばそれは大変危険なことだ。気ままに生きる妖怪にとって拘束されることは本能的に逃避することで、それが解かれたときの反動は考えたくもない。
　長く何百段もある階段を飛んでいく。曲がりなりにも神聖なる神社、形式をとって普段は歩いていくのだが今回は事情が事情で端折った。
「む、あれは……」
　小さかった屋根が近付いてくると鳥居付近に二人の影が見えた。どうやら今にも飛び立とうとしているようで寸前で間に合った。
「霊夢、と魔理沙か」
「あら、慧音じゃない。珍しいわね」
「この前ぶりだな」
　鳥居の側に降り立つと挨拶を交わす。
「二人は出かけるとこだったのか？」
「ええ。魔理沙がいきなり来て異変だーって言うから博麗の仕事をまっとうするのよ」
「そうか、では一通りのことは魔理沙から聞いているのだな？」
「人里付近で妖怪を見かけない。藍やマミゾウ、天魔もか。大妖怪の姿が見えないって話は。あと、萃香もいないわよ」
「なっ、あの酒呑童子殿もか……。いつもの放蕩癖ならば良いが、異変に加担しているとなれば面倒極まりないか……」
「能力が厄介なのよねぇ……」
　面倒くさいし、と霊夢は吐いた。
「目星はあるのか？」
「とりあえずそこの辺の妖怪にふっかけて事情を聞くわ。蛇の道は蛇、同じ妖怪のことは妖怪に聞けばいいし。湖の方は特に変わりなかったんでしょ？」
「ああ。ルーミアやチルノたちはいたぜ。でもフランを除いた紅魔館

組はみんな出払ってるみたいだった。戸締りが固いおかげで図書館には入れなかったし……」
「そ、じゃあそこでいいわね」
「あまりチルノたちに吹っかけてくれるなよ。最近肌寒くなってきたせいか、ただでさえチルノのテンションが高い」
「はいはい、適度にボコボコにしとくわよ」
「そういうわけじゃないんだが……」
「ほら、早く行こうぜ霊夢。ただでさえレミリアたちより出遅れてるっていうのにこのままじゃあ美味しいとこ持っていかれちまうぜ」
「私としてはまとめて持っていってもらいたいところよ」
「なんだよぉ。せっかく人が暇そうなところを誘ったのに。慧音も行くか？」
「いや、私はいい。妹紅に人里を任せているからな。今の所実害はないといえ、異変の最中だ。私は私の仕事をまっとうするさ」
「そっか。じゃあ異変は私と霊夢が解決してくるから、また美味しい茶菓子を頼むぜ！」
「む、それはーー」
「私はおせんべいがいいわ。お茶も頼むわよ」
「霊夢もか……」
「じゃ、先行ってるわよ」
「あ、おい霊夢。ーー行ってくるぜ慧音！」
「ああ。怪我の無いよう気をつけるんだぞ」
そう言って飛び立って行く二人に慧音は手を振った。大妖怪が関わっている手前二人だけに任せていいものかと思うが、異変解決のスペシャリストと自負する魔理沙と博麗の巫女である霊夢だ。実力的にも問題ないだろう。
博麗神社から人里に帰る最中、かつて寺子屋に通っていた面影を残しつつも頼もしくなった二人に慧音は少し頬が緩んだ。

忽然と人が消える

忽然と人が消える。

当たり前のように隣を歩いていた恋人。出かけてくると言って家を出た家族。一度二度話したことがある程度の知り合い。

そんな彼ら彼女らが忽然と消えた。何の予備動作も言動もなく、まるで最初からその者がいなかったかのように消失する。部屋に落ちている髪や食べかけの料理といった痕跡があるにも関わらず当人は全く姿が見えない。ときに人は戯れに消えたのだと笑い、行方不明だと訝しむ。やがておかしいと感じ人はそれを

ーー神隠し

と言って恐怖した。

その神隠しの正体である、スキマ妖怪ーー八雲紫は自宅たるマヨヒガにて現在起きている事態の情報収集に努めていた。藍が出た当初は構わないと放置していたのだが、一週間、一〇日、数日と経つと問題が出てくる。ーー食料が尽きたのだ。初日は温かい作り置きがあった。二日目は冷蔵庫に入った作り置きがあった。三日目も保存の効く作り置きがあった。四日目、五日目、六日目は外の世界から持ってきた冷凍食品で凌いだ。一週間経ったあるとき、紫は気づいた。冷蔵庫に食料はなく、あるのは横棚に積まれた即席麺だけである。

「人里は慧音と妹紅がいるのね。マミゾウが消えたーー。あら、幽香……と文とにとり？　珍しいわね。竹林と冥界には特に動きはない。魔法の森も辺なところはないし……。霊夢と魔理沙は異変に気付いたのね。妖怪の山は……天魔がいない、か。華扇にも特に異変はないし……あ、目があった」

そして、紫は適温にしたコタツにて伏せながら自身の，境界を操る程度，の能力を駆使しながら幻想郷中の地を見ていた。彼岸から冥界まで、怪しいところはことごとく見たがおかしなところはない。

「紅魔館組は……異変解決に行ったわね。どこに行ったのかしら、レ

ミリアの能力なら目星は付いてるだろうし」
　まるでテレビのチャンネルを変えるように景色を変えて行くがレミリアの姿や異変の正体は見当たらない。
「西の森、はないか。どうせなにもないだろうし」
　再び人里へと景色が戻った。慧音が妹紅と合流したようで、二人で門のところでなにやら話している。目視できない程度で近くにスキマを広げると聞き耳を立てた。
『そっか。霊夢や魔理沙が動いたら大丈夫かな』
『ああ。異変解決は時間の問題だろう。だが消えた妖怪たちが心配だ、妹紅には解決まで人里に滞在してもらいたいのだが、構わないか？』
『私と慧音の仲だろ、別に遠慮しなくたっていいさ』
『ありがとう妹紅。そう言ってくれて助かる。お返しとはいかないが、今日はお前が好きなキノコ鍋をご馳走してやろう』
『おお！　本当か？　私慧音のあれ好きなんだよなぁー』
『この季節は特選素材だぞ、たっぷり堪能してくれ』
「なによあれ、彼氏と彼女じゃない。やーねぇー、ほんと。幻想郷の人口が減ったらどうしよ」
　愛用の扇をぱたぱたと動かし、最後の一袋である海苔せんべいを齧りながら紫は呟いた。
「ていうかマミゾウがいなくなってる時点で絶対めんどくさいわよね。ただでさえ神格を持ってるから私の能力が効きにくいのに。藍は敵対することはないだろうけど、マミゾウは……あ、天魔もじゃない」
　至高の力を持っていても妖怪という枠組みから完全に脱することはできない。マミゾウや天魔のように信仰や霊峰で修行を重ねたものは神気を帯び始め魂は輝き始める。天上よりも先に住む神々には敵わないがほんの少し妖怪から神へと近づくのだ。それでも妖怪が神の力を持っているだけで神にはなれない。
　能力的には権能に近い紫だが、そういった神格を持つ者には自身の力が通用し辛かったりするため，程度，と示すのだ。

「もーう。冬眠する前にややこしいこと起こしてくれて、絶対に許さないわよ」
いなくなった藍を恨めしに思いながら正体に目星をつける。藍が加担するほどだ、主人である自分を差し置いているわけだからよほど惚れ込んでいるのだろう。決して自身を見限ったなどという結論には至らない。書き置きがその証拠だ。
「……」
頭が働かない。おそらく即席麺ばかりの食事事情が祟ったのだ。
「……」
なにか、引っかかった。
「……」
ぼやっとした怠けた頭から切り替わる。現在のそれは賢者の思考。端的にまとめた情報を脳内で箇条書きにすると、雲がかった違和感に悩む。
「藍ーー、マミゾウーー、天魔ーー、妖怪の山、沢。博麗神社、霊夢と魔理沙。人里は慧音と妹紅。レミリアが目星をつけて異変解決へと乗り出した。それで……
ーー西の森？」
紫は自身が西の森を、先ほどなぜ「なにもない」と言ったか疑念に感じた。たしかに、西の森には注視すべくところはない。だが、妖怪の山や竹林、紅魔館が関与していないのであれば一番疑わしくは身を隠すことも可能な西の森を疑うのが当たり前なのだ。
「最近の異変は見知った顔が起こしているから私の考えが鈍っただけ？　ーーそんなはずがないわ、私は全てを見て考えている」
なにかが足りないのだ。
「冬眠前だからと言って別に特別頭が回らないわけでもない」
欠けている。
「鈍っているわけでもない、感覚がおかしいわけでもない」
八雲紫はその違和感を知っていた。
「ずれているのはーー私の認識」
すべてが噛み合った。八雲紫はそれを知りすぎていた。

そもそも、妖怪として最高位に属している藍や自分に影響を与えている時点で犯人は限りなく絞られるのだ。本来紫にとって簡単にたどり着くはずの答え。

「ーーそういうこと、ね」

大妖ーー八雲紫は本格的に行動を始めた。

一、

「なるほど……」

蝋の明かりを頼りに書物を読んでいた少女の名はーー稗田阿求。紫がかった髪を耳にかけた様相は見た目幼くとも独特な緊張感を醸し出す。夜は冷えるからか羽織を着て、卓に座り読みふけっていた書物の題目は『妖怪百景』と呼ばれるかつて人間が書き記した妖怪図鑑。実際に見聞きした阿求に比べれば制度は格段と落ちるが、実際に会った者以外はまったく記さない阿求と違い風の噂で聞いたものも含め記載数では上である。

「たしか、彼について書いた絵巻があった気が……」

積み重ねられた書物の中から目的のものを探す。特別暗闇に目が慣れているわけでもなく、灯火を翳しながら指をさす。

「む、これですね」

上に乗った分厚い書物を逃して、二種類まとめられた絵巻物を取った。一つは〝上〟、二つは〝下〟と印されこれが二つで一つだということがわかる。

部屋にあった一番の長机を三つ並べた。元から転生の代償によりか弱い体であったためか、少し息を吐く。煩わしくなった羽織を適当に畳んで座布団に置くと絵巻物の紐を解く。

「私の予想が正しければーー」

左から右に〝上〟と書かれた絵巻物を流す。古物特有の香りが鼻腔を突いた。続いて、〝下〟と書かれた絵巻物を〝上〟の下に並ぶよ

うに開いた。結末をいきなり見てしまわないように気をつけ、準備が終わると右上へと視線をやった。
「『古き神々』……これは八百万の神々のこと、ですか。陶器や楽器、すべてに意思が宿る」
　それには多くの妖が描かれていた。
　外の世界にあれば国宝級と讃えられるほどの逸品。阿求には描き手の名は分からぬが、筆の入りが最上級なのは理解できる。
「『三吉鬼』、『舌長ばばあ』、『石妖』、『足長手長』、『おとろし』……。私が知らない妖怪もいる」
　根拠はないが、この絵に描かれたものたちはすべて実在したのだと受け止められた。一筆書きとでも言うのか、絵に迷いの一因すら見当たらない。今世はまだ少女だが、何百年と培ってきた経験は記憶としてすべて継がれている。この絵の描き手はそれほどまでに印象を与えられたのだ。垣間見える短い雲からこれが地上ではないことがわかる。先へ先へと絵をなぞる。すぐに，上，が終わると，下，に向く。
「後続とも言える，上，は物質的な形の者が多かったですが、前に行くほど人の形を成していく」
　細部まで描かれたそれはもはや一人一人の表情も伺える。笑いながら歩むものもいれば、なにかされたのか涙を流しながら前を追い立てるものもいた。
「これは……『ろくろ首』の赤蛮奇さんーー『伊吹童子』に『星熊童子』、つまり萃香様と勇儀様ぁ……!?　……『団三郎狸』マミゾウ様に賢者の式である『白面金毛九尾の狐』ーー！」
　冷静な表情から口の開いた間抜けさを出す阿求だが、さらに先を見て目を見開いた。
「誰一人が、妖怪の一座を率いてもおかしくはない面々。萃香様に至っては鬼の頭領『酒呑童子』。それでも、ここに描かれたすべてが彼を前に歩を同じくする」
　絵巻物は絵を基調としているが、数行の文が書いている。
「ーー『努努な忘れそ、百鬼夜行が跋扈せむ』。まさか、ここまでの勇

名を馳せた大物が正体とは、二人も吃驚仰天しそうですね」
百鬼夜行の先頭ーー月を背に煙管を蒸した男を撫でながらそう言った。

二、

鈴の音が鳴っている。
濃密な魔と聖の気配が辺りを包む。
「なに、あれは……」
逆柱に括り付けられたままのレミリアが目を見開いた。
それは本来、ここにはいない存在である。傍にいた咲夜も能面な表情を失って冷や汗を流している。
「ーーおー、やっときたか」
波々酒の入った杯を片手にそれに寄っていったのはもちろんこの屋敷の主人、日和だ。
「久しぶりだなーーお六」
きめ細やかな鱗が何百と並び、しなやかな柔らかさを残した長巻の身体。雌雄問わずに伸びた髭はゆらゆらと日和をくすぐってくる。蒼白の体色の上には、衣服と思われる乳白色の着物に桃色の線が入っていたものを着ていた。首には革のベルトに鈴が二つ付いている。
『お久しぶりでございます、ぬらりひょん様』
「あいも変わらずお堅いな。日和で良いぞ」
『いえ、私は今も昔もぬらりひょん様の傍に在るものでございます』
「かかかっ、その忠は俺が望んでいないものとわかっているにもかかわらずにな。性格が悪いものよ」
『失礼ですね』
長年の友と言わんばかりに二人は笑いあった。
ひびが割れるようにそれが輝き始めると、一人の女性が現れる。
ちょうど日和の身長くらいの高さから女性は首元に付いた鈴を鳴ら

しながら降り立った。
「竜宮が主、海神(わたつみ)の娘ーー竜宮童子、名をお六。今より一度(ひとたび)、百鬼夜行を執り行うと聞き舞い降りました」

鳶がーー

鳶がーー鳴いている。
穏やかな風が吹く丘の上を、高山笠を被った男が歩いていく。旅人装束に見えるが、それにしてはやけに持ち物が少ない。見渡す限りの草原、一夜を越す用意もない男はどこから来たのだろうか。
大きな桜の木があった。
花弁から差す日は眩しく、花見をすれば思わず目を細めてしまう。男はひょいと一飛びすると枝を一段、二段と上がっていく。やがて一番太い枝へと腰を付けた。
視界に映るはどこまでも空いた草原、香ったのは土と舞った桜の花である。
ふとーー声がした。
男は息を吐いた。
「またか」と呟いて桜の木から降りる。

『おーい！　どこ行った妖怪野郎！』

草を分けながら桜の木、男に近付いてくる影があった。
腰丈以上に伸びた黒髪、鮮やかな光を描いている。黒の襦袢の上には白い直衣を纏っている。頭には円筒、烏帽子が乗せられている。首元に飾られた数珠。
女はいわゆるーー，陰陽師，だった。
「今日もえらく騒がしいなぁ、陰陽師」
「うるさいぞ妖怪。お前がわかりやすいところにいないのが悪いんだ」
退治してやろうか、と言うと男はからからと笑った。胸を張った女は成人した顔つきながら線は細く、残念ながら以降の成長に期待はできないだろう。
「かかかっ、お前さんに退治される奴なんて小物も小物よ。鼠を猪と

言うには無理があるぞ」
「変な言い回しをするなこの戯けが」
女は懐から取り出した扇子で男の頭を叩いた。
「いっーー、なんだそりゃあ」
電気が走ったような感覚がした頭をさすりながら男が聞いた。
「ふっふっふ、見よこれを！　私が呪力を三日三晩込めに込めた最高位の対妖武器！　仰いだだけで並みの妖怪なら近づくことすらないだろう」
「おいおい、そんなもんで頭ぶっ叩くなよ……」
「ま、さすがの大妖怪ともなればちくりとするだけか」
ばさばさと扇子を開け閉じしながら女はつまらなさそうにしている。どうやら良い生地を使っているようで、多少雑に使っても壊れないようだ。布地だと思われるそれには多数の漢字が書かれている。そして、中心には金糸の五芒星が見え隠れした。

一、

人の世界か、妖の世界。
いつの世も相容れぬ存在として対立にあった。人は妖を駆逐し、妖は人を捕食する。妖には人に無い強靭な力があったが、人には妖に無い勇猛な知恵があった。関係は一〇〇〇年と続きやがて妖は衰退を辿る。もはや妖は人無くして生きることが叶わず、人は妖を置いて先に生きる。次第に数を減らしていく妖はその生存を危惧し、未だ神秘が残る霊峰や地底へと逃げた。
そして、八雲紫が一つの世界を創り上げた。名を幻想郷と呼び、人妖交わる楽園であった。
「おーい日和、どこ行ったんだー？」
「……む、萃香様」

「お、天魔。日和がどこに行ったのか知ってる？」
「庭先に歩くのを見かけましたよ」
「そっか、ありがと」
しかし、その幻想郷も何百年と経てば綻びが現れる。
人の成長が止まったのだ。
九尾の狐が追われたように、酒呑童子が討たれたように。人の真価は他の生物に無いその成長速度にある。呪術が化学と呼ばれ幻とされる時代。妖そのものの存在が否定され、妖の生命力である，畏”が枯渇した。未だ外の世界にて祀られる存在ならばいざ知らず、小妖怪などは特にそれが顕著に表れる。
人の成長が止まったことにより、人は妖を当たり前だと思うようになった。善悪は問わずとも、隣人と理解することで妖という存在に恐怖をしなくなった。
「だからこそ、今日がある」
日は沈み始め地が赤く染まる。
地平線が伸びた先には真っ白の月の頭が見えた。
「なにしてるんだ、日和」
「萃香か、たまには花見も良いと思ってな」
「花なんて咲いてないだろ」
「咲いてるさ、立派な花弁が今も快々と見えやがる」
枯れた桜の木を撫でながら日和が呟いた。
萃香はどこか気まずい表情を浮かべており、次の言葉に迷っている。
「そっか……」
「ふん、えらく辛気臭いな。お前さんらしくない」
がしがしと角の間に手を置いて雑に撫でた。
「うわっ、やめろよ」
「かかかっ！　ほら、行くぞ。逢魔時ーー俺たちの時間だ」

二、

「霊符『夢想封印』ーー」
「ぬわぁーっ！」
色相豊かな霊力が弾ける。土埃が立つと同時に半円を描くように白髪の少女が飛んできた。
「ぶへ」
白髪の少女ーー犬走椛は天魔が治める妖怪の山の白狼天狗である。
’’千里先まで見通す程度’’の能力を持った彼女は優秀な哨戒として任務に就いていたが、突如現れた紅白巫女によって無差別に倒されていた。
「ほら、早く答えなさいよ。あなたたちの親分が今回の異変に加担していることは知ってるのよ」
「し、知りませんよ博麗の巫女！　というか、天狗の上層も天魔様と三羽烏が消えて奔走してるんですからっ」
「なによ、親分の動向一人知らないなんてとんだ組織じゃない。……あ、もしかして隠してるんじゃないでしょうね？　片っ端から捜索しても良いのよ」
「それだけはご勘弁を！　ただでさえ大天狗様から最近圧がかかってるのに、博麗の巫女が物理的に攻めてきたとなれば減給ものです！」
「霊夢、どうやら本当に知らないみたいだぜ？」
「当てが外れたかしら」
指の間に札を挟みながら頬に手を当てた。
どうやら天魔の行方を知らないのは本当のようで、天狗も右往左往としている。それの証拠か、妖怪の山の侵入者である霊夢と魔理沙の対処に割り当てられたのが椛だけなのだ。
「文がいれば事情を聞こうかと思ったけど、いないのなら仕方ないわね。魔理沙、人里から虱潰しに探すわよ」
「うえ？　まじかよ。得意の直感はどこにいったんだよ」
「知らないわ。いつもなら適当にぶらついてたらびびっと来るんだけど、今回は来ないのよ。頭、というかなんか身体自体もやっとした感

覚があるし。たぶん、異変の首謀者の仕業ね」
「萃香みたいな全体に及ぼす能力ってわけか？」
「それすらも知らないわ。せめて紫がいれば聞けたんだけど……」
「ーーあら、呼んだかしら霊夢？」
「って言えば来るだろうから……来たわね」
「なんだそりゃ」
　二人の隙間に現れたのは紫色の空間。リボンに結ばれたスキマから上半身を出してくすくすと笑みを浮かべているのは八雲紫である。
「で、紫。今回の首謀者はどこ？」
「あらあら、私はあなたが攻略本片手にゲームを進める娘に育てた覚えはないわよ」
「あなたに哺乳瓶と襁褓片手に育てられた覚えもないから関係ないわ。それに、今回の異変はどっちに転ぼうが結末はそんなに変わらないんでしょ」
「さすが霊夢。天性の才能をずらされながらもそこまでわかるのね。さっきまで手のひらで踊らされてたゆかりんとは大違い！」
「うっさいわね。ていうかあんたも能力受けてたのね。どうりで最近見ないと思った」
「ええ、能力によって家でごろごろさせられていたわ」
「……まあいいわ」
「無視しないでよ……」
　二人の会話に、椛は自身の尻尾を隠しながら聞いていた。博麗の巫女たる霊夢の人柄は知っている。幻想郷の均衡を保つべく働く彼女は、無闇矢鱈に妖怪を追い立てはしない。しかし、妖怪の中でも大妖怪、さらにその最高位である八雲紫の前では小心者でいた。未だ弱肉強食がある妖怪の山では天狗といえど数百年に一度、半霊獣と化した獣に捕食されることがある。それと同様、戯れに消されてもおかしくないのだ。
「とりあえず、首謀者のところに案内するのはいいでしょう。そろそろ向かわなければ時間と、そこで震えてる子犬が可哀想ですし」
「い、いえ全然……！」

「悪かったわね、椛」
霊夢と魔理沙、そして紫を含めた一行は妖怪の山を出て人里の方角へと飛んで行く。
「あなたも来るでしょ、魔理沙？」
「もちろんだぜ。異変を解決するのは霊夢と私ってのがお決まりだからな」
「そうね、今回はむしろあなたが必要。もしかすると霊夢より大変な立ち回りになるかもしれないから頑張ってね」
「どういうことだ？」
「ただ妖怪たちの相手をしてもらうだけだから気にしなくていいわ」
「さすがの私もお前や藍みたいなのを同時に相手するのは無理だぜ？」
「時間を稼ぐだけでいいのよ。それに、たぶん藍たちは手を出さないだろうから大妖怪は気にしなくていいわ」
少し人里が見えてきたところで紫は止まった。それに合わせて二人も止まると、紫は空中に閉じた扇子を向けてスキマを開けた。
「これから行くのは正真正銘、普段あなたたちが遊んでいる，幻想郷の妖怪，じゃないわ。何千年も生き、人を化かしてきた妖怪たちの巣窟と、その総大将が座す屋敷。
霊夢、魔理沙。良い機会だわ、しっかり見てきなさい。そして、あなたたちの力を示してきなさいーー」
ドレスを靡かせながら腕を振るうと、二人がスキマを包み込んだ。きっとどこかに繋がっているであろうそれに、いきなりのことに霊夢は睨みながら、魔理沙は声を上げながら入って行った。
「ーーあの馬鹿に」
誰もいなくなったそこで、紫は誰にもなく呟いた。

『百鬼夜行』

「ーー人を化かす妖がいると聞いた。どんな小物かと思えば、ずいぶんと大物がいた者だ」
「京から妖祓いが流されたと聞いたが、なんと可愛い娘だなーー」
「妖怪、お前の名は？」
「陰陽師、お前さんはなんて名前だ？」
　棄てられ、忘れられた廃村。かつて地域の小競り合いから戦が起き、兵でもない民が数百人殺されて曰く付きとなったそこで二人は出会った。
「名前はここに流されるときに失った。私に名前は無い」
「俺もこの方名前なんてもんに拘ったことがない。人間や他の妖怪が付けた異名みたいなもんはあったが、いちいち覚えてねぇな」
「そうか……。親からもらったりはしなかったのか？」
「親ぁ？　そんなのは生まれたときからいない。生まれた、というよりも在ったが正しいのかはわからんが」
「寂しいな。名前もなく一人で生きているのはいくら妖怪でも可哀想だ」
「お前ら人間と一緒にしなさんなよ。妖怪は元々個に生きるもの、群れで生きる奴もいるが所詮そんな奴は人間を真似てる臆病者だけだ」
「ふははっ！　そんな目をしながら臆病と言うとは、やはり強かな奴だ。ま、今は良いか。いつかお前に名前が出来たらそのときは教えてくれよ？　ーー妖怪」
「さあな、そんな時ゃいつ来るか。酔狂な奴がいればあるかもなーー陰陽師」

一、

「お前さんも来るかい、レミリア・スカーレット」
「どうして私があなたの傘下にならなきゃいけないのよ。あなたの場所を私に譲ってくれたら考えてあげるわよ」
「お、そりゃできない相談だな。ここにいるのは俺に寄ってくれたモンたち。裏切るような真似はできない。まぁ、そもお前さんが巻きつけられている逆柱が行くから来ることになるんだが」
「うわー、なによこれ！　私を縛り付けたまま動くなんて冗談じゃないわよ！　辱めじゃない！」
　一本足の用法で跳ぶ逆柱は日和の周りを一周し、軒下から庭先、そして屋敷門へとレミリアを巻きつけたまま跳んでいった。日和はその様子を細くニヤついた目で眺め、自分もレミリアたちが向かった場所へと歩を進める。懐から煙管を取り出し、火口を撫でると煙が上がった。
「今夜限りだぞ、日和。おそらく私も紫様も見逃せるのは一度のみだ」
「ああ、わかってるさ」
「幻想郷で生きる人間には与える影響が大きいからの」
「それでも逞しく生きて欲しいもんだ、人間も妖怪も」
「私としては毎晩でもいいけどな。ただ酒呑めるし」
「毎晩お前さんが満足するだけの酒を用意するのは骨が折れそうだ」
　いつのまにか後ろにいた藍、マミゾウ、萃香に答えながら屋敷門まで続く石畳を歩いていく。西を見ると半分ほどの太陽がのぞいており、もうすぐ本格的な夜が来る。
　屋敷門にいた、おそらく小鬼であろう二匹が頭を下げて同時に門を開けた。
　木の軋む音がする。砂利を巻き込んで門が開かれる。一瞬あった隙間から森へと長く続く道が見えた。そして、
「ーー準備は良いか、お前たち」
‘‘妖怪’’がいた。
　鬼も、天狗も、河童も、狐も、狸も、化物も、八百万も。およそ妖怪だと名高い者たち全てがそこにはいた。屋敷より続いた石畳を空けるように並んだ彼ら彼女らが待っていたのはただ一匹の、自分が寄

るべくして寄った主である。
「お六」
竜宮童子の名を呼ぶと、屋敷門から最初にいたお六が傍に寄ってきた。今は人型の姿ではなく、海神の娘としての、竜の姿で在る。尾鰭を揺らしながら日和の前に行くと、それがさも当然だと日和は歩きながら乗った。
『久しぶりの感覚ですね』
「相変わらず乗りやすい体だな、お六」
『現代ではそれが竜宮でもハラスメントに当たると忠告しておきましょう』
よくわからない横文字に日和は「かかかっ」と笑って誤魔化した。少しずつ浮いて行く竜宮童子に藍、マミゾウ、萃香の三人、後ろには天魔と勇儀がいる。さらに覗くと数多の妖怪たちが付き従っている。
「あの娘は良いのか、日和。縛られたままだぞ」
「ああ、構わんさ」
後方で身体をくねらして逃れようとするレミリアを見ながら天魔が問うたが、問題ないといって日和は即答した。
煙管を一蒸しした日和は後ろを振り向くと、一言紡いだ。
「『日は西に落ち行(ゆ)き、夜が来。逢魔囁き人を化かす者たちが驚きき。寄る辺無かりして、失くせし者たちよ。
努努思ひ出せ、
ーー百鬼夜行の刻(とき)なり』」

夕暮れを背に

「ーーどこに行くのかしら、そんな百鬼(ばか)共を引き連れて」
「かかかっ、欺けたと思ったが……さすが今代の博麗の巫女、簡単には行かんか」
「当たり前よ。あなたが今しようとしていること、人里にどれほどの影響を与えるか分かってるの？」
「だからこそ、さ。博麗の巫女よ、近頃人間と妖怪の距離が近くなったとは思わんか？」
　夕暮れを背に博麗が立つ。日和の背には月が顔を出し、互いの立場を如実に表していた。在り方は似ているのかもしれない。妖怪に寄る人間と、人間に寄る妖怪。方法は違えど、どちらもが妖と人の均衡を保つべく行動している。
「何を言っても引かないのかしら、妖怪」
「何を言われても引けねえのさ、博麗」
「そ、なら答えは簡単ね」
「言わなくてもわかるだろう、やるべきことは」

一、

「これは独り言だが、お前に名前をつけてやろうか、妖怪」
「名前なんて要らんさ。というか、独り言にしては大きいぞ」
　蒸した煙が空をたゆう。擦れた小屋を適当に整えたそこの、枠すら無い窓からぼやいた声が聞こえた。男の煙管だけではなく、他に煙が上がっていた。どうやら後ろにいた女は飯支度をしているようでき
のこ類に彩られた鍋を掻き回していた。
「だが、名前が無いと呼びにくいだろう。最近はここにお前以外の妖怪が住み着くようになった。未だ妖怪と呼び続けたらいつか勘違いが起こる」

「そもそも、お前さんなんでここに住み着いているんだ。飯支度を整えてくれるのはありがたいが、許可した覚えが無いんだが……」
「お前もここを不法占拠してるんだろう？　どうせなら無法人同士仲良くしようではないか」
「抜かせ、俺もお前も立場が違うだろう。俺は気ままに歩む妖怪、お前は流れと言えど人間なんだ。適当な人里に混ざって人間と生きるのが良いに決まっている」
「人の世は私には窮屈すぎる。お前みたいな価値観に縛られない者といたほうが良い」
「そうかい」
　面白い奴だ、と笑うと男は煙管を懐に仕舞った。
　何度も編み直されたであろう藁座布団に座ると女から器を渡された。少し垂れ指についた汁を舐めると、悔しくも舌が喜ぶ味がする。
「んで、お前さんは何でこの地に流されたんだ」
「……突然だな、そして遠慮ない」
「労ってほしいか？」
「いや、短い付き合いだがお前にそんなものは似合わん」
「ずいぶん失礼だな、そしてお前さんのほうが遠慮ない」
　一を出せば一を返すような子供染みた会話に時間が経つが、幸いに渡世から弾かれた二人に時間はある。女の方も語ることには抵抗がないようで箸を進めつつ口を開いた。
「見合いを断ったのだ。線も細く、妖を祓うしか能がない私に興味を持ってくれた者がいてな。家柄も無駄に高かった故、そのような相手、生涯現れんと思ったのだが……」
　一口に切った筍をかじって続きを話す。
「如何せん私の琴線に触れなんだ。醜く肥えた畜生に嫁ぐ気は無いのでぶっ飛ばしたら軟禁を食らった」
　生涯現れんやらと言った話はどこに言ったんだと男は思った。醜く肥えた畜生、とはどのようなものを表すかは知らんがこの図太そうな女が言うほど、余程のものだったのだろう。
「そして次はーー」

「まだあるのか」
「む、お前聞きたいと言ったんだろう。今は黙って聞け」
「はいはい……まったく」
　飯の恩もあるが為断れず耳を傾ける。
「土蜘蛛、という妖に聞き覚えはあるだろう」
「土蜘蛛と言えば確か皇家の天敵。厄を撒き京を病と飢饉に陥れた災害とまで称された妖怪だな」
「ああ。その土蜘蛛を、私から遡った先祖が一度は封じたんだが大陸の邪教者が印を解いてな。土蜘蛛は意識なく、狂えたまま京を暴れまわった」
「そんな話、聞いたことないぞ」
「当たり前だ。京の陰陽師が封じたにもかかわらず、大陸の邪教者に印を解かれたとなれば陰陽道への信頼が揺らぐ。
　印を解かれた土蜘蛛は妖を誘う香を餌に、私の一族の住んでいた土地へと追い込んだ」
「西でそんなことがあったとはなぁ……」
「だが、さすが陰陽道の祖たちが討てず封じるに及んだ業。京一の腕を誇る我が一族でも数が揃えど真の災厄には敵わなかった。三日三晩病が降り注ぎ、侵され陰陽師が倒れていく中奴が壊したのは朝廷お抱えの禿げに文句を言い軟禁されていた私の蔵だった」
「お前さんまた軟禁されていたのか。しかも僧に文句垂れるたぁ無謀な事をしやがる。最近はどこもかしこも仏道なんて半端なもんに縋り付く。ありしもしない浄土目指して祈るたぁ人間らしいがな」
「ああ、私もそう思った。だから仏とやらの不完全性を説いたら皇太子が腹を立てたのだ。
　で、壊れた蔵から外を覗けば私の親族が倒れている。さしもの軟禁中の私でも、そのような状況では出るべくと思ってな。とりあえずその土蜘蛛を、
　ーーぶちのめした」
「かーっ、お前さんあの土蜘蛛を倒したのか？　ありゃあ俺たち大妖怪の中でも、物理的な腕っ節は畜生と変わらんでも硬さと疫病には定

評がある。病を退けながらあの甲殻を貫くたぁやるじゃないか！」
「だろう、だろう？　にもかからずに、だ……！　私の両親は私の力がどうとか言ってまたもや蔵に入れ軟禁したんだ」
「いや、そりゃあお前さん……見合い相手ぶちのめし御上に楯突く、生半可な武力持ったもんがいたらそうなるだろう……」
　呆れた様子で男は言った。少し冷えたきのこ汁を飲み干すと、沈みかけたお玉杓子を取って注いだ。
「お前さんが軟禁地獄に囚われていたのはわかったが、この地に流される理由にならんだろう？」
「うむ。ならんな」
　毅然とした態度で言った女に男はまた溜息を吐いた。
「……妖怪をだな、治療したのだ」
「ほう」
「小さな小さな小鳥だった。雀にも劣らぬ体躯だが、小妖怪の類だったのだ。傷を受けたのか血の付いた羽で私の軟禁されていた蔵の格子から入ってきた」
　ーー日が射す格子の隙間から、女はいつも天道を眺めていた。女は正しいと思っていることをしているだけで、どうやら人間は理解してくれないらしい。幼い頃から隣人と逸した力を持った女はいつも一人だった。
『お前は自由で良いな』
　女は自身も気付かず呟いていた。床に落ちたそれは誰の耳にも届かずに蔵へと籠る。
『ほら、もう一度。お前を飛べるようにしてやろう』
　ーー蔵の扉が開かれた。僧衣を纏った男たちがこちらを見ている。女に一言言うと、数珠のようなものでできた紐で腕を巻かれた。抗うことなく市街を進むと京の民が女を見て囁いている。
『ああ、そうか。それが人の決めたことならば、私は黙って従おう』
　ーー女は理解していた。女が人の世に生きるには、あまりにも自分は乖離しすぎていると。自由を奏でながらも誰よりも自由から遠かった女は、奇しくも自由であった一匹の妖怪によって自由を得たの

だ。
,,無法人,,という、人権を剥奪されたやり方で。
「だから、私はここに流されたのだ。おそらく仏道は京から我ら陰陽道に属する者を廃する気だったのだろう。最近は私が倒した土蜘蛛を除き、名のある妖怪どもは減った。妖怪を危機とせん仏道と、それに取り入られた朝廷は少しずつ我らを瓦解させている」
「……」
「別に陰陽道を蔑ろにするのは構わない。私はそこに拘ることはないからな。でも、人には忘れて欲しくないのだ。ここまで紡いできた歴史には、少なくない犠牲があったのだと。慣れては欲しくないのだ。人は古来より確かな脅威にさらされていたことに」
女が特別年老いているわけでもない。むしろまだ少女から抜けたばかりで、その艶は最盛と言える。それでも男が見た表情にはそこはかとなく人を思いやる慈愛を感じた。
「つまらないだろう、なにも変わらないことは。不変たり得ることは良いかもしれんが、どこかで綻びが出るものだ。
私たち人間は妖怪に比べれば短命、変わることも変わらないことも長き目で見れんからわからん」
「かかっ、まさかそんな馬鹿者だとはな……。人に省かれ流されて、それでも人を可哀想だと嘆くか」
「それでお前に会えたのだ。儲けものだな」
「はん、どうだかの。そいつらのお陰でこの状況があると考えたら文句言ってやらんと」
「ふはは、正直じゃない奴め。寂しいお前に寄ってやってるんだ。感謝されど嫌に言われる筋合いはないわ！」
「はぁ……勝手にしろ」
空になった椀を置くと、食前にいた窓際に座った。指先でつまみ火を落とそうとすると、指を弾いた音がした。
「……ありがとよ」
「礼には及ばんさ」
蒸した煙が月を覆う。囲炉裏に揺れる火が虫を誘いそうだが、男の

煙管がそれを拒んでいた。

二、

不気味な静けさが辺りに降りている。
百と妖怪が並んでいるが一匹も声を出さないでいた。いや、出せないのだ。幻想郷の法たる博麗と、百鬼夜行の主たるぬらりひょん。存在そのものが根底から違う両者の空気に呑まれていた。動こうと思って動けるのは数人、それこそ大妖怪と、霊夢の隣にいる魔理沙だけであろう。
「日和ーー」
「ああ、なにも言わんでいいさ。ここのるーるは知っている。人が妖怪と、妖怪が博麗と戦うべく平等を期した，すぺるかーどるーる，で戦うんだろ。無論、用意してある」
「あら、用意周到ね。いいわ、遺憾無く、禍根無く。

ーー，楽園の素敵な巫女，たる私が退治してあげる、妖怪」
閃光が瞬く。
瞬きすら許さない刹那、霊夢の背後に無数の弾幕が現れた。

どこか既視感を

どこか既視感を覚えていた。
まるでそれが当たり前だと言わんばかりに眩い閃光が煌めいた。
すでに他の妖怪たちは後ろに下がり、石畳に穴が空き土煙が舞う。
「ま、さすがにこれくらいじゃやられてくれないわよね」
大幣ーーお祓い棒に飾られた紙が揺れた。
腰に手を当て、先ほどよりも高い位置で相手の反撃を待つ。博麗の巫女は幻想郷屈指の実力者、それは管理者である八雲紫でさえ認めるほどである。赤い月を照らす吸血鬼を、桜を探す亡霊姫を、人に絆された鬼を、月からの逃亡者たちをーー、名だたる者を相手にただ一人戦い抜いてきた。もちろん隣には白黒の魔女がいた。しかし、彼女は義務に伴ったものではなく、普通の魔法使い、だ。
「ーーっ」
直感ーー。
宙返りの格好で頭を下げ、背後へ勢いに任せて足を出す。地面を蹴ったような感覚が右足に響くと、すぐにそれを掴んでお祓い棒を振るった。
「おっ、と」
「っち、当たりなさいよ」
「かかか、そう簡単にやられはせん」
一歩下がった日和が愉快そうに笑う。　真剣味の無い表情に悪態をつきながらも霊力を込めた札を投げた。
「軽いぞ、博麗の巫女」
並みの妖怪ならば消滅する霊力を込めたそれを、日和はさらに上回る妖力で打ちはらう。一瞬の停滞とともに、霊夢は再び背後へとお祓い棒を構えた。
「さっきからやりにくいわね、あんたっ」
「捉えようとすればするほどややこしくなるぞ」
瞬きするまで視界に捉えていた。ーーしかし、いつのまにか死角にいる。

二人を除いた妖怪たちは両者の姿を騒ぎながら見ていた。妖怪ながらも霊夢を応援する者、妖怪であるがゆえに日和を応援する者。二者択一のなか、彼らが見ているのは煙のように撒きながら霊夢を攻めたてる日和の姿である。
「やはり、まずはそこからか」
「彼奴の能力はやりにくいからのぉ」
藍とマミゾウは言った。
「日和が持つ能力の前に、力や技は無力になる。知っていれば対処できるかもしれない。だが、根本的なところをずらされればそれすらも敵わない。この幻想郷で、初手であいつに敵うのは天性の才を持つ霊夢を除いて他にはいない」
笠を投げ視界から日和が消える。霊夢は鬱陶しそうに弾いた。
「しょーもないことばっか、早くスペルカードでも使ってみたらどう？」
「まぁ、それも良いかもしれんな」
開始から繰り返されたのは日和が蒸け、霊夢が防ぐ。霊夢の攻撃は柳に風か、流されるばかりだった。未だ遊ばれているとわかっているのか霊夢が用いた霊力は最初の札のみで肩の息すら上がっていない。
「それじゃあ、一勝負目だ……！」
日和の指に挟んだ札が風に煽られる。

ーー百鬼『『伊吹童子』と『星熊童子』」

「おいおい、面白そうなもん作ってるじゃねえか！」
「さすが日和だ、私たちも混ぜてくれるなんてね！」
濃密な妖力が現れた。
茶色の二角、赤色の一角。鬼、萃香と勇儀の二人が召喚される。
それを見た霊夢は「やっぱり……」と呟くと苦虫を噛んだような表情を浮かべた。
「悪いな、霊夢」
「数で押すのは好きじゃないけど、今は私たちで一匹だ」

「かかか！　超えてみろ博麗の巫女、まだまだ終わらんぞ！」
「笑ってられるのも今だけよ！」
　鈍い音で地面が没する。鬼二人は刹那の間に霊夢の前に跳ぶと、同時に拳を出す。一撃が容易く命を刈り取る鎌、もちろん死なないように手加減はしている。だが致命傷は避けられずこの先の戦闘復帰は期待できない。そうなれば後は下で集まった妖怪たちに牽制をしている魔理沙に任せることになる。
　縫った隙間に体を滑らせ、札を切った。

ーー霊符「夢想封印」

　七色の光が二人を襲う。追尾式のそれを交わすように飛ぶがなんとか撃ち落とす。
「どうやら、あんたに召喚されたものは力に制限が付くみたいね」
「ああ。さすがにそのまま出すのは，すぺるかーどるーる，の意に反することになる。能力に制限を設けることで可能にした」
　どちらも勝てる可能性がある、それが弾幕ごっこである。故に八雲紫はルールを加えた。避けきれないものを作るのは禁止で、どこかに弱点を用意することで避けられるようにする。これが理不尽なゲームバランスを防ぐためのルールだ。むろん退治と表した今回とてそれは適用される。
「だが、二人はまだ終わってないぞ」
「鬼舐めんなよ霊夢！」
「これを百持ってきてから他所を見な！」
　桁違いの力と頑丈さ。古より語られた神話をその身に宿す二人は霊夢が込めたスペルカードを受けても倒れることはない。むしろさらに足を踏み込み拳を振るった。動きを止めるために放った拳は空気を押し風を起こす。バツの字に気圧された風は霊夢の動きを見事に止めた。
「……っ、なによこれ！」
「ほらっ、これで終わりさ！」

上から日和、左右から萃香と勇儀の絶対不可避の攻撃。頭を掴むように出した日和の右手と、振りかぶった腕を二人が霊夢に出す瞬間ーー。

「調子に乗んなっ！」

今までにない圧と霊力が霊夢から滲む。霊夢を中心に嵐が吹き荒れると三人は吹き飛ばされた。

「おいおい、なんだ今の霊力は……」

「二人はこれで退場よ！

ーー霊符「夢想封印ー散」

……傍らでこいつがやられるのを見とくのね」

散った霊力弾が見えるが否や、萃香と勇儀目掛けて飛んで行く。信用か、過信か。上から手を伸ばした日和に霊夢は振り向いており、二人には背中を向けている。

霊力弾に当たった二人から悔しそうな声が上がった。召喚されたときと同様に、姿が見えなくなると並んでいた石畳の上に立っていた。

「ちぇ、まだまだ楽しめると思ったのに」

「ははは、まあたまにはこんなのも悪くないね」

杯を一杯。酒を喉に流せば楽しそうに日和と霊夢に野次を入れる二人に戻った。

「あんたもそろそろーー」

「とはいかねえな。二番勝負目だ、

ーー百鬼「『金毛白面九尾の狐』」

来いよ、藍」

「ーーふむ、次は私の番か。久しぶりに手合わせ願うぞ、霊夢。手加減

はせん」
すれ違うように霊夢と重なった日和は二枚目のスペルカードを出した。金色のそれを紡ぐと霊夢の隣に八雲藍が現れる。
「藍まで……あんたまさか、ここにいるやつら全員出す気じゃないでしょうね！」
「さあ、どうだろうな。だが、百鬼の主を討ち取る気なんだ。あと幾人か、倒してもらわんと俺には辿り着けんぞ！」
霊夢は囲まれた状況を脱するために小さな弾幕を展開した。日和は煙のように当たらず、藍は九尾で全て弾いてしまう。

ーー式弾「ユーニラタルコンタクト」

スペルカードを出した藍から、青と赤の弾幕が交互に展開される。扇をなぞるような形で迫ってくるそれを、霊夢は地面とつま先が触れながら避けた。
「こっちはスペルカードも使えるのね……」
「制限付きとはこういうことか」
「まったく、藍の相手は昔からめんどくさいのよ！」

ーー夢符「二重結界」

掲げられたスペルカードから赤と紫の二種類の結界が周辺を包んだ。見物と化した妖怪と、魔理沙を巻き込まない程度に広いそれは日和と藍を覆った。

ーー霊符「博麗幻影」

ーー霊符「夢想封印ー集」

博麗の幻影、七つに分かたれるが一つになろうとした弾幕が藍を襲う。本体である霊夢は先に日和を討ち取ろうと接近した。

「何度やっても、真正面からは討ちとれんぞ！」
三人で挟撃を繰り出したときと同じく、日和は手を突き立てようと霊夢に迫る。速さは幻想郷一と誇るブン屋よりも速いかもしれない。翼もないにもかかわらず、それを可能にするのは大妖怪としての海を彷彿とさせる底知れぬ妖力だ。
今まさに巫女服に包まれた白い肌に指が触れようとした時、

「……んん？」

煙を撒いたように、日和の能力と似たように霊夢の姿が掻き消えた。
「ーー日和！　この結界は夢と現世の間を再現している、目に見える全てのものは虚と思え！」
右方で幻影と戦っているが、藍の声は上方から聞こえてきた。
「なるほど、俺と化かし合いをしようって言うのかい」
「そのつもりは無いわ。あんたを今、落とすつもりよ」
耳元で囁かれた声に反応し首を向ける。逆さになった霊夢と目のあった日和は思はず腕を振るうが煙と消える。
反応できたのは、長年生きてきた経験がゆえであろう。
「ーーっ」
裏拳の要領で出した一撃を霊夢はあわや額に当たらんといった寸で受け止めていた。

ーー式輝「四面楚歌チャーミング」

藍が二枚目のスペルカードを出した。
蛇のようにうねる青く細い弾幕、霊夢の身長と同等の大きな弾幕が日和の姿をかき消した。
「幻影だけで済むわけないわよね……！」
それでも、あの九尾を足止めしたのは霊夢だからこそだろう。一尾一振りが十の妖を、人を殺す力を持った藍を破るのは並大抵の存在に

は不可能だ。
　乾いた血色の弾幕を避けながら、霊夢は自らが張った結界が割れていくのを目にする。今回の符は、事前に霊力を貯めに貯めたやつにもかかわらず容易に割った藍には後ほど折檻すると決めた。
「そらっ、まだまだーー！」
　手を広げ、尾が九つで半円を形造る。色の白くなった先から狐火が起こり霊夢に迫る。
「これだから技巧派は嫌なのよ、魔理沙みたいなパワー馬鹿なら良いのに！」
「おい、それはどういうことなんだぜ!?」
　避けた狐火が地面に触れる。するとさらに大きくなった狐火は膨れ弾け、百を超える弾幕と化した。

ーー夢符「封魔陣」

　青白い結界が立ち上る。
　さっきの結界とは違い、今回の結界は明確に空間を仕切る目的のもの。これもまた三日三晩霊力を注ぎ続けたものであり、破ることができるのは八雲紫といった根底から結界のあり方を崩せる者だけだろう。
「ほう、なかなか硬そうだ」
　囲まれた当人ーー日和は面白そうに結界を手を丸め叩いていた。中身の入った酒瓶を落としたような音に霊夢の実力を感じた。
　だが、その余裕も長くはない。結界の中には先ほど藍が放った狐火も含まれ、遮断している結界に触れると弾け膨れ数を増した。
「おいおい、どうにかしてくれ藍！」
「黙れ馬鹿者、こっちは霊夢がいるんだ。マシと思え！」
　霊夢の弾幕を紙一重で避けながら藍は叫んだ。
「紫の式なのに、博麗の巫女たる私に反抗とはいい度胸じゃないーー藍」
「ぐぅ、違うんだ！　これは紫様のためでもあるんだ！　……そ、それ

に、今の私は八雲藍でもあり百鬼夜行の『白面金毛九尾の狐』だ！
関係あるかぁーー！」
藍は自棄になったのかスペルカードを一枚切りながら霊夢に肉迫する。

ーー式輝「プリンセス天狐　―　Ｉｌｌｕｓｉｏｎ―」

霊夢の近くにいる藍は全方向に向かい弾幕を撃つ。直感と反射神経を頼りに霊夢は避けていくが、一番弾幕が薄い場所に出ると上方から特大の弾幕約三十も飛んできた。
「甘いのよ、こんなものっ」
弾き、避け、相殺し。
すべてを裁くと霊夢は上で少し息を荒げる藍を見上げた。
「霊符ーー」
「まだ倒れてくれんか……

ーー式輝「狐狸妖怪レーザー」

……！　……ん」
手を前にかざすが藍のスペルカードが反応することはなかった。
「狐狸妖怪レーザー！　……あれ」
「そうよね。あんたみたいな奴を召喚出るだけで、その制限は多いはず。鬼(あいつら)はスペルカードが使えず肉弾戦のみ、狐(あんた)は肉弾戦が行えずスペルカードのみ。でも、スペルカードが無制限なんてそんな理不尽なことはできない」
「ま、まさか……」
「三枚が限度なのよ！　くたばりなさい、このぽんこつ駄狐！」

ーー霊符「夢想妙殊」

虹色に輝く誘導弾が藍に向かっていく。無防備になった藍はそれ

を避けることはできずに正面から当たった。焦げ臭い匂いが立ち込め、尾の萎れた藍が石畳みにヘタレ混んだ。
「覚えとけ日和めは……」
「ふはは、無様よな狐」
「黙れ狸」
皮肉りあう二人をよそに結界内で狐火から逃げ回っていた日和は二枚のスペルカードを取り出した。

ーー夜行「ぬらりとすり抜け」
ーー夜行「ひょんと浮く」

結界の角に吸い込まれるように姿が消える。やがて結界の外に姿を見せるとやれやれと溜息を吐いた。
「回避用だったもんをここで使うとは……」
二枚で一枚のスペルカード。どちらも無ければ使うことはできず、どちらか一枚では何の効力も無いものだ。日和はこれを霊夢が必殺とした弾幕を避けるために用意していたのだが、思ったより結界が強固で使用することになった。
「妖怪と人間が戦えるようにするなんて言ってたが、強ち間違いじゃなかったな」
いつか見た八雲紫と霊夢の弾幕ごっこを思い出す。
戦っている理由は見物人と化した日和には分からなかったが、それでも自分より上等な能力を持った八雲紫が勝つのだろうと見ていたが勝敗は自分の予想と反した。人間である霊夢が八雲紫に勝つ姿を直に見たのだ。境界を操るという強力な能力を持つ、八雲紫に。
そのとき日和はようやく弾幕ごっこ、スペルカードを理解したのだ。それは妖怪の戦いとは違い、人と妖が楽しむことができるものであると。
「そろそろボスステージに行っても良いかしら?」
「かかかっ、まだ折り返し地点だぞ。

ーー百鬼「団三郎狸」

頼んだぞ、マミゾウ」

「儂を呼んだからには先の狐よりは仕事をすると約束しよう」

日和ーー

日和ーーぬらりひょんとマミゾウが出会ったのは今より八〇〇年ほど前。九尾の狐が八雲藍になる少し前だ。

見知った妖怪は人間に淘汰されるか、長命を利用してこの国を見廻ると言って自分の前から消えた。生まれたときから自らの力を知ったマミゾウは、聡明な頭から必ずいつか現世に飽きて消えるだろうと自覚した。なればやれることはやろうと、好いも嫌いも両方楽しんでやると人にまで化け輪に入った。

『お前さん、人に化けるんだろう。面白いことをしてるじゃねえか』

そんな折、山奥の岩肌になぞるように建てた自分の家に帰ると知らない妖怪(おとこ)がいた。

『何ぞ、お主。ここが佐渡ノ団三郎、マミゾウの敷居と理解して越えておるのか』

『かかか、そう硬いことは言うな。同じ妖怪、仲良く行こうじゃないか。聞けばここ佐渡は酒が美味いと聞いた。なにか無いのか?』

『ずいぶんと肝の太いもんが来たの。その妖力から儂を喰いに来た奇特な奴かと思うたが……』

『共喰いはせん。同じ種で争うなんてくだらん』

『呑気な奴じゃ。今の世、増えすぎた妖は我が世我が世と血気盛んにもかかわらずそんな考え方ができるなんての』

『どうでも良いさ、そんなもん。ほら、上等な壺酒があるんだろう?出すが良い』

『しょうがないーー』

不思議な奴だった。変な奴だった。よもやマミゾウは、そんな奴が一〇〇〇年を越える付き合いをするとは思いもしなかった。

一、

「なるほど、儂にかかった制限はこれか」

ーー壱番勝負「霊長化弾幕変化」

持っていたスペルカードが太鼓を叩いたような音とともに虚空に消える。明るい青が十六現れると、人型を模した弾幕に変化した。童遊びであるかごめかごめのようにマミゾウのあたりを旋回し霊夢に向かって弾幕を展開し始めた。

「正直あんたの相手が一番したくないのよーーね！」

ーー夢符「退魔符乱舞」

空に舞った赤い札が可視化できるほどの霊力を纏う。無造作に投げた札は一直線にマミゾウのところに向かうと人型を模した弾幕を相殺していく。

ーー霊符「陰陽印」

さらに霊夢は急降下し、今いた場所に向かって掌を出す。光の輪が起こり、二色にわかれた光線が日和に向かって放たれた。それに対し日和も妖力だけを無造作に込めた弾幕で迎え撃つ。

「やるなぁ、それならこれどうだーーマミゾウ！」

「おうさ！」

迫り来る札を捌いたマミゾウは声に合わせて日和の元に行く。やられる前に落とすと霊夢は弾幕を打つが避けられてそれを許してしまう。

「いつも驚きを提供する化け狸の真骨頂じゃ！」

木の葉を抑えながら腕相撲の要領で二人は手を握る。にやりと笑った二人はくるくると周り、空気に溶けていった。

「……」

数秒、誰もいない間が続く。

霊夢は自らに警鐘を鳴らし警戒するが、視界から二人は完全に消えていた。制限はあると言え、大妖怪を退ける霊夢を見ていた魔理沙は、いつもの直感は無いのかと眺めるが霊夢も動くことはない。今は動くべきではない、と計算された道よりも信ずる自身の感は囁いていた。

「ーーかか、背後が空きだぞ」

瞳のみが背後を向く。声に反応すべく腰を捻るが突き出された腕に艶のある黒髪が触れた。

「ーーな、めんなっ！」

寸での所で頭を動かし避け、腕を掴んで一本背負いで地面へと叩きつけた。修行中の身であった幼い頃は人外相手にする技術ではないと文句を垂れていたが、まさか今役に立つとはさすが私と自身を褒める。

「だから、儂は背後が空きじゃと言ったじゃろ」

「……ーーマミゾウっ」

下に敷いた日和の声が女へと変わる。口角を描いたいやらしい笑みは里で見た化け狸のそれだ。

化かされたと文句を出す暇なく弾幕が迫る音が耳を撫でた。

「終わりだな、博麗の巫女」

天性の才を持った博麗霊夢だからこそ、であろう。八雲紫が大陸を含め周り、楽園の調停者に相応しい人間を探した。小さな島国の、ある地域で生まれたある一族の赤子。攫われたことに今更文句はない。巫女として奉仕することに文句はない。彼女が愚痴のように吐くのはいつも賽銭箱が空であるとその一言のみ。

直感に頼るまでもなく霊夢はスペルカードを切った。

ーー夢符「二重大結界」

霊夢を中心に二重の結界が展開された。日和に変化したマミゾウ

ごと呑み込み、上から日和が放った弾幕は全て弾かれた。さらに霊夢は結界を都合よく通り抜ける弾幕を繰り出す。
「うおっ」
「ぬっ」
今までより量の多い弾幕に対処して行く。しかし結界内で動きを制限されたマミゾウは紙一重に避けつつも角に追い詰められた。
「やるな、博麗の巫女」
「あんたの戯言には付き合わないわよ。ただでさえ後が控えてるのに、そんな暇無いわ」

ーー神技「八方鬼縛陣」

神の技、冠した名に相応しい霊力が込められたスペルカードを掲げる。円を描き、さらに間を縫うように四角い弾幕が敷き詰められている。
「こりゃ、まずいな……」

ーー弐番勝負「肉食化弾幕変化」

目の前のマミゾウーーーーーーーではなく、結界外の日和から声がした。彼（？）の周りには紺碧の獣が列を成し、霊夢の弾幕に当たっていく。
「どうせ、そんなことだろうと思ってたわ！」

ーー神霊「夢想封印ー瞬」

そのスペルカードは霊夢にとって奥義に入る一枚。
今まで使ったスペルカードとは一線を画した、本来の弾幕ごっこでは一枚のみと条件付けられているものでもあった。

ーー逢魔「妖怪の総大将」

対し、日和はようやく攻撃用スペルカードを使用した。
一〇〇に及ぶ、彩り豊かな弾幕を出し、霊夢の弾幕を撃墜していく。日和の弾幕はさらに霊夢の弾幕に当たると数を増やし結界内で霊夢を追い立てる。
これによって本腰を入れ始めたのか、結界を足場に全方向から霊夢を無力化せんがため肉薄する。
「ーー邪魔！」
自ら結界を解いた霊夢はすぐさま上空に飛び、化けを解いたマミゾウをも超える。

ーー神技「八方龍殺陣」

鬼を縛る陣があれば、霊夢は妖ではなく神と同格の龍すら落とす。地に陽光が注ぐように、視界を埋め尽くさんばかりの弾幕が現れた。
「儂に任せよ」

ーー参番勝負「延羽化弾幕変化」
「繋ぎーー」
ーー四番勝負「両生羽化弾幕変化」

赤い鳥と青い蛙が入り乱れる。花吹雪のような光景に視界が奪われ、外野の妖怪たちは騒めいた。
「うわ、霊夢すげー」
「ははははっ、さすが博麗の巫女だねぇ」
陽は落ち夜が来た。逢魔は彼方へと去り、夜空は弾幕が星と化す。
「終わりよーーマミゾウ」
もはや数えきれぬ弾幕がマミゾウを襲った。一発当たるとなし崩しに防いでいた弾幕が崩れ、二発三発と煙を上げて落ちて行く。そのまま行けば地面にあたるかと思われたが、萃香や勇儀、藍たちと同様いつのまにか石畳みの上に立っていた。

「……はぁ、疲れたの」
「いやぁ良かったよ二ッ岩の、なかなか面白かった」
「酒呑童子にそう言わるとは光栄じゃ……日和、礼にお主の煙管を寄越せ！」
「ん……ほらよ」
懐から煙管を取り出した日和は、勢いよくマミゾウに向かって投げた。回転したそれを器用に指にかけて受け取ると、火口を叩いて妖術で煙を出す。二度三度空気を入れると口から煙を吐いた。
「幻想郷に来てこれほど動くことになるとはの。どうじゃ化け狐、お主より格好良かったじゃろ」
「……うるさい」

二、

月が輝いている。欠けることなく朧げに、それでいて確かに己を主張する姿に吸い込まれそうだ。
幻想郷では人気のない西の森。そこでは今、異変解決のために博麗の巫女が妖怪たちを相手に弾幕を星の数ほど煌めかせる。
「かっかっか、ここまでとは思わなんだ、博麗の巫女。霊夢と言ったか」
「私もここまでとは思わなかったわ。本来ならお月見と洒落こんでるのに、今ならやめても半殺しで許してあげるわ」
「そうはいかんさ。初めも言ったが俺もそれなりに大義があって生きている。吐いた唾を飲み込めるほど、俺は下品じゃない」
「ふん、その言葉忘れるんじゃないわよ」
「もちろん」
「そーー」
霊夢の背後に再び眩く弾幕が展開された。少し前と同じように石畳みに穴を開けると、お祓い棒を背後に振るった。

「認識をずらす、かしら」
「まぁ、八雲の風に言えば，認識をずらす程度，の能力だな」
お祓い棒を受けた右手と、逆である左手を振り下ろす動作をする。それに霊夢は日和に目を合わせたまま右にずれると弾幕を避けた。
「もう慣れたわ」
一言、右足の先に向かって弾幕を放つ。空間が揺れたと思うと少し驚いた顔をした日和が現れた。
「博麗の巫女……いや、霊夢。俺は後二枚スペルカードを切る。それまでにお前さんを討つことができなければ俺の負けだ」
「このまま行けばジリ貧だろうし構わないわ」
「かかっ、遊興のわかる女で良かったぞ」
戦いは終盤を迎える。芸術のような弾幕はやがて終わりが起き、祭りの終わりに似た雰囲気が纏う。
日和は霊夢よりも高い位置に来ると一枚目を掲げた。

ーー宵口「大妖怪と陰陽師の密会」

五行に倣った、手を広げても抱えきれない大きさの妖力が浮かぶ。今すぐに弾けそうなそれは未だ膨張を続け圧迫している。
「そらっ、どうする！」
ごう、と突風を鳴らし霊夢に迫る。視界一杯に来る五色の妖力玉を迎え撃つべく霊夢は久しく感じる霊力の枯渇に鞭を打ち唱えた。

ーー神霊「夢想封印」

五つに対し繰り出したのは七つの虹色の霊力弾。大きさは叶わぬが拮抗するだけに足りる霊力が込められていた。雷が落ちたような音ともに計十三の弾幕がぶつかり合う。
辺りに霊力と妖力が漏れ、あわや外野に当たるというところで紫色の結界が大きく二人を包んだ。
「ーーまったく。藍、加担するのは良いけどここを取り締まることが

できるのはあなただけなんだから考えなさい」
「ゆ、紫様。申し訳ありません」
スキマから八雲紫が現れた。
藍に軽く叱責すると、扇を張った結界に向けさらに妖力を込め広げた。
「くっーー」
「やりおる」
陣羽織が激しく揺れている。霊夢は目頭に置いた腕から日和を見るが、相手は当たり前かのように未だ浮いていた。しかし、どうやら少しは当たったのか服が少し焦げているような気がした。
「これが最後を飾るには相応しいーー」
日和は紺色のスペルカードを懐から出した。霊夢は先ほど聞いた最後のーー,,ラストワード,,であると理解し、自身も最高のスペルカードを取り出した。
「妖怪(おれたち)と、人間(おまえさん)との戦いさ!」

ーー＊百鬼夜行＊

「これで終わりよ、妖怪!」

ーー＊夢想天生＊

景色が白黒に見えた。それはおそらく、濃密な霊力と妖力がぶつかったことによる空間障害。強力な情報量に耐えられなくなった生を司る根幹がエラーを起こしたのだろう。
妖どもは満月を背に立った。
百に並ぶ妖は博麗の巫女へ牙を立て、寄る辺に勝利をもたらさんと迫り来る。
星の重力すら、神々の威風すら、如何なものすら彼女を捉えることはできない。万物から浮いた彼女はただ一人、宙を漂う。
結末を見ていたのは二人。

人と妖怪が共存する楽園の管理者、八雲紫。博麗の巫女に唯一寄り添う白黒の魔法使い。前者は既にそれがわかっていたのだろう。慈愛に満ちた顔ですべてを見届けると、口元に当てていた扇を鮮やかに閉じた。

後者は歯痒い思いでその光景を眺めていた。ああ、私はなにもしなかったと慟哭しながらも、これが正しい終わりなのだと感じていた。彼女は何も言わずに風に煽られ落ちそうになった帽子に手を当て、いつものように好奇心旺盛な顔でにやっと笑った。

光に包まれる中、一匹の大妖怪が垣間見たのはいつの日かの暖かい思い出。

相容れぬ存在と暮らした、忘れじの記憶である。

珍しくバツの悪そうな

「ーーすまねえな、負けちまった」

珍しくバツの悪そうな、申し訳なさそうな表情で日和は頭を掻いた。目線は居所が悪いのか適当な夜空へ向いている。

「ああ、お前が負けたせいで私は紫様にこっ酷く叱られるだろう」

「儂らの力を借りておきながら負けるとはなぁ」

「そうだそうだ、どうしてくれるんだ」

「あんたら素直じゃないねぇ……」

藍、マミゾウ、萃香の様子に勇儀は腰に手を当てながら笑った。杯を回しながら酒を撫でているのか、くいっと一杯煽った。喉仏が上下すると、唇を細めて日和の顔に酒気が吹かれた。

「あんたが負けたんじゃないよ、私たちが負けたのさ。私らは嫌で日和についてきたんじゃない、ついて行きたくてあんたの後ろを歩いてる。萃香たちは素直じゃないけど、別に攻めてないさ」

「おい、言うなよぉ」

詰まらなそうに萃香が口を窄めた。藍も目尻が下がって笑い、マミゾウは日和の煙管を蒸している。勇儀の言葉を聞いた日和は少し呆然とするが、後ろから押されたような感覚に蹌踉めくと振り向いた。

竜宮童子、天魔ーー他、百鬼夜行の面々がこちらを見ている。

『初めから、勝ち負けなどは気にしていません。

ここに集うはあなたの名に誘われた飲めや歌えやの無法です。妖のために異変を起こそうと、人のために異変を起こそうと、そんなことはどうでも良いのです。いつの日からか祭囃子が聞こえなくなったあなたが楽しそうに杯を揺らしている。それだけで、十分なのです。我らがーー百鬼夜行の主よ』

どこまでも蒼い瞳を持つ竜宮童子は、日和が知らなかった自分たちの真意を明かした。

彼女の瞼の裏に焼き付いているのは、今は昔の好い状景。庭の桜は花を咲かせ、そこには自らが寄った男と烏帽子を被る陰陽師の女が楽しげに話している。信じられぬは、その女に小妖怪が群がっているこ

とだろう。肩には鼬、烏帽子の中に入ったのか隙間からは狐の妖獣が覗いている。男が鼻先をつつくと驚いて隠れてしまう。その様子を見た女は驚かすなと人差し指で男の額を叩いた。
『まぁ、旦那が負けるなんて別に珍しいことじゃないからな』
　顔が三味になった付喪神が頷きながら言った。
『ぬははっ、鬼ほど力は強くないし』
『天狗ほど飛べるわけでもなし！』
『河童みたいに手先は器用じゃない。むしろ、不器用……？』
『呑み比べでも大蛇の女傑に負けてたぞ！』
『馬鹿野郎、あの人は名の通り蟒蛇じゃ』
『それもそうかっ』
　弾けたように笑い声が響いた。小さきものから大きなものまで、口を大きく広げている。その様子を見ていた日和は思はず声を漏らしてしまう。気ままに、柳のように生きるなどと言いながらもどこか胸には穴が空いていた。藍には消えるのかと言われ、それを否定することもできなかった。
「……人間が言っていたことはこういうことか」

　ーーいつかお前にも、誰かといる暖かさがわかる。でも、もしかするとその暖かさは誰かが消えて冷たさに変わるかもしれない。お前たちならずっと一緒にいられるだろう？　人間の私と違って、長い長い生なんだ。共に歩む者がいても罪とはならん

　一〇〇〇年越えても色褪せない、正しく自分が生きていた時代。妖は人に恐れられ、人は妖を退治すべく奔走していた。いつの日かまたそんな騒がしい日和がやってくると、俯瞰的になって見つめていたのは自分自身の方だった。
「ーー幻想郷は、そこまで狭い世界ではありませんわ」
　いつのまにか隣に立っていた紫が相変わらずの胡散臭そうな笑みを浮かべながら言った。
「人と妖が共に在る世界。優劣はともかく、あなたがそう悲観なさら

ずとも時代は移り行くのです。
藍もマミゾウも萃香も勇儀も天狗も河童も幼獣も、付喪神さえ含めてかつて気付かせてくれたあなたに気付いて欲しかったのではなくてーー日和」
「八雲の……」
「お久しぶりですわね、ぬらりひょん。ここ最近顔が見えなくて寂しかったですわ」
「また適当なことを言いおって。どうせお前さんのことだ、どこからか見ていたんだろう?」
「あら、それはどうかしら」
くすくすと紫は声を出した。
「ま、なにはともあれ異変はこれで終わり。あとの処遇はーー博麗の巫女次第」
首だけを後ろにやって、扇を指した向こうにはいつものように無愛想な顔をして腕を組んでいる霊夢がいた。
「博麗の巫女は調停者。ここの法でもあります。如何せん我が強すぎるきらいはありますが、それでもしっかり処罰を受けるように」
「かかかっ、わかっている。煮るなり焼くなり好きにすればいいさ。まったく、あれだけ霊力を巻いて立っているなんて、何者なんだ」
日和は、石畳みを草履編んだ草鞋を鳴らしながら歩いていく。どこか満足気な後ろ姿に紫は投げかけた。
「最初に言ってなかったかしら。彼女はどこまでも、,, 楽園の素敵な巫女,, 様よ」
「ああ、違いない」
物語は終わりを迎えた。
多くの者に知られず異変を起こした一匹の大妖怪は、百の妖とともに一人の人間に挑んだが阻まれたかのように叶うことはなかった。嘆くことなくからからと笑った男はいつものように懐に手を伸ばし煙管を取ろうとした。空を切ったことに、そういえば貸していたことを思い出し、やっとそこでため息を吐いたのであった。

一、

空は青く、ウロコ状に並んだ雲が地上に影を出す。少し冷えた風が境内を通る中、博麗神社はいつもより慌ただしく動いていた。
「まったく、なんで異変解決の宴会をいつもここでやるのよ、別にあんたの屋敷でも良いじゃない！」
「そう言うな霊夢。俺の屋敷じゃこの辺に住んでる奴が来にくいだろう。それにいつも宴会はここで開いていると聞いた、今日日も倣ってここにした」
「倣わなくていいのよ……もう」
料理に酒、果実汁まで。誰が来ても良いように博麗神社の境内に盛り付けていく。準備をしているのは数人、台所には藍と紅魔館から来た咲夜などが立っている。
「ほら、これは俺の持つ最上の酒どもだ。あとでお前さんにやるから許してくれ」
庭から見える和室に一本、二本、三本……と並べると外で料理を運んでいた霊夢の動きが止まった。釘付けになり、逡巡したかと思うと「あとでよこしなさい」と言って早足に消えた。
「やはり世の中酒だな」
「ーーそれを寄越せ日和ぃぃぃ！」
「っと、そうはいかんぞ萃香。今約束したのに反故にすれば本当に滅せられる」
妖術か、並べた酒は身を飛ばして来た萃香に合わせて消えた。
「ぐべ」
飛び付く気だったのか、床に落ちた萃香はそのまま和室に転がっていき先の廊下の壁に頭を打ってようやく止まった。
「お前にはまた別のを出してやるから、今は準備を手伝ってくれ」
「約束だからなぁ」
「鬼に嘘は吐かんさ」

両手を後ろにやりながら去った萃香を見送って、日和は布製の敷物を桜の木下に敷いた。どうやら博麗神社は春になると幻想郷でも一二を争うほどの見所らしく、昼は花見、夜は夜桜と飽きないことはないという。日和は来年にでも寄ろうと考えていると、鳥居の方から話し声のすることに気付いた。

「ねぇ、妖夢。お料理はもうできてるかしら」

「どうでしょう。早く来すぎたこともありますのでまだ準備途中では」

「ええ、せっかくつまみ食いしようと思ったのに」

「幽々様の場合はつまみ食いの段階で食べ尽くすので今日は絶対にやめて下さい」

石段を上がって来たのはふわふわと浮いた桃色の女性と、白髪の腰に二刀を下げ傍に半霊が浮いている。

「む、あなたは？」

先に日和と目のあった少女が、指を口に当てる女を庇うように立った。

「おお、お前さんらとは初見だな。今回異変を起こし、退治された日和だ。ちなみにわかると思うが、当然妖怪だ」

「これはご丁寧に。私は冥界、白玉楼の庭試兼剣術指南役、そしてこちらにおわせられます西行寺幽々子様に仕えている魂魄妖夢と言います」

「若いのに立派だな。宴会に来てくれたのだろう？　そちらのお前さんは腹が減ったのならこれを食べるといい」

「わぁ、ありがとう」

またもやどこからともなく、木籠に入った菓子の詰め合わせを出した日和は幽々子へと渡した。受け取った幽々子は嬉しそうに細い指で漁っている。

「幽々子様、私はいつものように手伝ってきますのでくれぐれも何かご迷惑を掛けないように」

「わかってるわ。そこまで子供じゃないのに」

もう一度口酸っぱく告げた妖夢に、幽々子は少し拗ねたように返し

た。慣れたように社に入っていく妖夢に手を振って、やがて姿が見えなくなると日和を見やった。
「あなたが紫が言っていた妖怪さんね」
「八雲のがなにか言っていたか。不躾なものじゃなきゃ良いが」
「紫はあなたの話をするとき、いつも『羨ましい』って漏らしていたわ」
「かかっ、あの八雲が俺を羨ましいと。まさかまさか、信じられん」
「そう言ってあげないで。彼女は自身の力が強大なのを理解してるから、どこか責任感があって独りになりがちなの。いつも大勢で過ごしていたあなたを羨ましがっても仕方ないわ」
「来れば良いものを。無駄に意地っ張りなところがあるからな」
「んふふ、でしょ。そこが可愛いの」
何度か、日和の元に紫は訪れることがあった。
特に用もなく、どちらかが呼んだわけでもないが互いの近況を屋敷の縁側で、暖かい茶を飲みながら話すのがいつもであった。幻想郷が生まれる前から紫とは出会っており、いつかこの世界ができたら見て欲しいと言われた。それは幻想郷ができてからだいぶ遅くなったが、ここに入ったのも直接紫から誘われたのが始まりである。
「日和、と言ったかしら。あなたもしかして、白玉楼に来たことがない？」
「んん？　白玉楼、か……。耳に覚えはないな」
「そう……。じゃあ、一度どこかで笠を失くしたことはない？」
「笠？」
と、眉を顰める日和の首にはいつも被っていた立山笠の姿はない。先の戦いで霊夢に対する牽制として投げ、見事に撃ち落とされてぼろぼろとなった。見かけた藍が時間はかかるかもしれないが補修をしてくれるとのことで預けているのだ。
「そんなこともあったかも知れんな。確か、西に見事な花を咲かせるという桜を見に行ったときか。そこの庵に、大層な歌を書く男がいてな。別れ際に一つ、歌ってもらった記憶もあるが……おそらくそこで失くしたのだろ」
「あらあら、やっぱり。去年の年末ね、妖夢と一緒に庵を掃除してた

の。そうしたら大きな桐箱があったからなにが入ってるんだろうなぁって期待して開けたら、絹で丁寧に包まれた笠が出てきたの」
「む、まさかお前さんはそこの……」
「ええ。西行庵は今、白玉楼と名を変えて彷徨える魂の管理をしているの。もしお暇があれば是非いらっしゃって。お祖父様のお話も聞きたいし、妖夢に頼んでお茶請けも用意しておくわ」
「おう、そうか。それは行こう。楽しみにしている」
「待っているわ。じゃあ、また後であなたのお話も聞かせてね」
籠に入っていた最中をもそもそと食べながら、幽々子は社の裏へと回って言った。縁側がある方だ、そこで時間が来るまで待つのだろう。
「ほら、霊夢に会うんだろ。宴会が始まったら挨拶なんかできないぞ」
「まあ待て妹紅。まだ昼も過ぎたばかりだ、そんな急がなくとも大丈夫だろう」
戻ろうとするとまたもや声が聞こえた。せっかち者が多いと覗くと見知った二人組がいた。
「おう、慧音と妹紅じゃないか。残念ながらまだ宴会はやってないぞ」
「あっ、お前はいつかの男妖怪！」
「こら妹紅。日和殿に失礼だぞ。こんにちは、なぜここに？」
人里の守護者である上白沢慧音と、竹林の不死鳥である藤原妹紅であった。
「今回の異変で退治されたから宴会の準備をな。悪いが二人とも、手が空いたら霊夢の手伝いを頼む」
「それは、構いませんが……。え、ん？　異変、退治？　日和殿が？」
「そうだ」
「異変……最近妖怪を見なくなった……。失礼ですが、その、日和殿はそこまで妖力を……」
「騙されるな慧音。こいつは昔から自分の力を能力でごまかしてるんだ。こいつの正体は八雲紫や風見幽香と並ぶ大妖怪だぞ」
「かかか、言うな妹紅。慧音が驚くだろう」
「黙れ。京であったことを忘れたとは言わせないからな」

「あれはお前が勘違いしてかかってきたのが悪いんだろ。俺に言わせりゃ自業自得だ」
「くっ、覚えとけよ」
　二人の記憶は平安の終わり、京付近の山麓に至る。蓬莱の薬を飲み不死となった妹紅は、生きる術として妖術を習得していた。里、村にかけ妖怪退治を生業にしておりたまたま歩く妖怪に目を付けたのだ。人型ではあるが妖力は少ない、ならば最近開発した妖術の実験台をしようとしたところ妹紅は化かされていたことに気付かず地面を舐めることになった。時たま会い、からかってくるため少し苦手意識を覚えている。
「二人とも来るなんて珍しいじゃない」
　正面から現れた霊夢が声をかけた。
「おー、霊夢。慧音がな、今回の異変について聞きたいからって付き添ってきたんだ」
「それならそこの男に聞いた方がいいわよ、元凶だし」
「別に良いんだが、慧音がこいつを大妖怪だって信じられないらしくてな。直接聞いてもごちゃごちゃになるだろうし、編纂もあるから」
「そういうこと。上がりなさい。妖夢が来て手が空いたし、暇をしてたから話してあげるわ」
「ありがと。行くぞ、慧音」
「あ、ああ……。私はなんてことを。半妖の私が八雲紫に並ぶ妖怪に頭突きを……どうすれば、謝れば良いのか……人里が……」
「ほら、もう良いから。あいつはしょうもないことを気にするやつじゃないからさ。危なかったら私が燃やすから」
　妹紅に肩を抱かれながら、霊夢を含め三人は社に入っていった。
　久しぶりに妹紅に会った日和は相変わらず変わっていないと、精神的に幼かった彼女はいなくなったのだと懐かしんだ。
「あいも変わらず硬い半妖よな」
　ふと、耳に羽の羽ばたく音がした。天狗が来たかと空を見ると人一人たやすく覆えるほどの鳥が飛んでいた。珍しい鳥獣だと見ていると、先ほど見たような桃色が降りて来た。

「……っと、少しぶりですね、日和」
「華扇もな」
　音を立てず着地したのは茨木華扇であった。胸元には彼女の髪と同じ色の薔薇の飾りが揺れている。
「どうでした、霊夢は？」
「ああ。なかなかに強かな女子（おなご）だった。人間にもかかわらず百鬼夜行に臆せず、まさしく八雲が選んで来た鬼子よ」
「ふふ、でしょう？　たまに私も面倒を見ているのですよ」
「ほう、あの茨木が目をかけるとは……やはり只者ではないな」
「わかっているくせに。ーー日和」
　男の名前を呼んで、華扇は手を取った。
「寂しさは、紛れましたか？」
「む……」
　目を白黒としながら日和は華扇に取られた手を見た。
「お前さんも、あいつと同じようなことを言うんだな」
「と言っても、私は仙人になってからですが……。あの陰陽師には敵いませんね。あの人は、あなたの唯一の理解者だったのでしょう」
「さあ、な。理解者……ただ自分の都合が良いことを言っていただけな気もするがな。かかか、ほら。もうそろそろみんなが来る。お前さんも挨拶をして来ると良い」
「ええ……ええ。あとで、私にお酒を注いでくださいよ」
「幾らでもやろう」
「では、またあとで」
　華扇を見送り、誰もいなくなった鳥居を残し日和は空に浮かんだ。およそ準備は終わり、残るは料理だけだろう。このかた火元と無関係の自分では力になれることはない。
　博麗神社から、自身が住んでいる西ノ森へと向かう。魔法の森、人里、沢、妖怪の山、そして樹木に囲まれた日本家屋にたどり着くと門前に降り立った。
「……」
　未だ戦いの名残が残ったそこは石畳に穴が空き、先日の光景を如実

に思い出させる。
久しぶりに人間に負けたのだ、口角を上げた。
閂を抜き、門を開いた。軋む音を立て一人分の間ができると体を入れる。手を離すと勝手に閉まり、一際大きな音を鳴らし閉まった。屋敷の中は異変の最中と違い、閑散としていた。日和の耳には静けさが響いているにもかかわらず、かつての祭囃子が聞こえていた。
ーーどうだ。お前用の羽織を作ってみた。似合うと良いんだが、着てみてくれ
ーー最近は自分が少し、歳を取ってきたような気がする……む、誰が婆だ
ーーすまんな、妖怪。お前を残してしまうことを許してくれ
ーー私はお前と、ずっと一緒にいたかった。ありがとう、こんな私といてくれて。こんな私に、愛しい人との最期をくれて
枯れた桜の枝が揺れた。そこにはもう、死んでしまい花弁を実らせぬ老木だけがある。思えばこいつとも長い付き合いだ、としみじみとする。噂に聞いた妖怪桜ならいざ知らず、こいつはただの木だ。なんの力も篭っていない、妖たちを見守ってきた木である。
微かに砂のかかった縁側へと座り、藍と語った夜より置き放しになっていた肘掛けへとかけた。
懐から、マミゾウより返してもらった煙管を取り出した。鉄製の火口に爪を擦ると煙が立った。
「……そういやぁ、名前、聞き忘れたな」
伸ばした足の先に酒瓶が転がるのを感じた。萃香か勇儀辺りがそのままにしていたのだろう。
いつものように笑い声をあげると、どこかで鳶の鳴く声があった。
「まったく。いつの時代も、人間は面白い」
目を瞑れば桜の木に座った自分に、どこからともなく妖怪と呼ぶ声が聞こえる。また来たかと煩わしく思うと同時に、いつか心が満たされていたのを遠くの日に反芻した。

二、

「……様。……和様」
「……那ぁ。起き……」
　声がする。暗い世界に落とされるように二人の声がした。
「んぅ……、誰だ」
「お。起きたね旦那」
「日和様、宴会が始まってるっていうのにどうしてここにいるんですか！」
「……っく、あぁ。お、文とにとりか」
「はいそうです、って違いますっ！　霊夢さんが怒ってますよ。今回の異変、なんと日和様が起こしたと言うじゃないですか。その詳細を聞こうと旧地獄から天界まで集まって、同じ話を何度もする羽目になって『あの妖怪はどこだ』と札を持って取材どころじゃありません」
「私は良いんだけど旦那には別の用事があるからね」
「あ、そうです！　なんとなんと、やっとこさ私たちは日和様の正体に辿り着いたんですからね。幽香様のお力添えもあって自信満々です！」
「かかかっ、そうか。じゃあ、その答えは神社に向かいながら聞こうか」
　身体を伸ばすと目が覚めた。河童のにとりが飛ぶことが苦手なことを知っていたので、腕を取って背に乗せた。
「悪いね」
「構わんよ、にとり」
　にとりが首にまで手を回すのを確認するとゆっくりと浮いた。文は日和の正体を書いた手帳を開きペンを持っている。
「それで、俺は何者（もん）になったんだ？」
「それはですね、ずばりぬりかべだと！」
「んー？」
「絶対違うだろう。私は何度も旦那は提灯小僧だと言ったんだーー」

陽は傾き始めやがて夜が来る。逢魔時だとは言うが、今夜は魔物は現れないだろう。

寝過ぎだとは思ったが偶には良いかと開き直った。宴会に行くべく向かう空で、日和は二人に出した自らの正体に行き着く経緯を聞いていた。途中風見幽香や名を馳せた妖怪が口に出され二人は一体何をしていたのかと突っ込みを入れること少々。

それにしても、

「俺がぬりかべに提灯小僧かぁ……」

疲れたような嘆き節が、忙しなく隣を飛んでいた烏天狗の羽音に消えていった。

【終話】たゆう煙が

たゆう煙が薄くなり消える。赤い布で整えられた長椅子に男は座っていた。

「ほらよ、三色三本にみたらしい二本。いつも毎度あり」

「いつも世話になってるぞ、女将」

「やだよしてくれよ。あんたにそんなこと言われたら気味悪いったらありゃしない」

「長生きしてくれよ。この団子が消えたら寂しいからな」

「もう、そんなこと言っても何もやらないからね」

団子が五本乗った皿を隣に置くと、女将はお盆を持って店へと消えた。湯気がたった湯呑みを見ると茶柱が一本立っている。

「ーー一本、貰っていいかしら？」

「良いぞ」

「ありがと」

吸っていた煙管をひっくり返し、地面に灰を落とした。火種が消えるよう足で砂へと埋める。懐に戻すと、四本残った団子からみたらしを一本取った。

「紫から聞いたわ。あなたのこと」

「そうか」

「ええ。人間と暮らしていた変な奴だ、ってね」

「なるほどなぁ、八雲……。どう思った」

「別に。私も神社に鬼やら仙人、胡散臭い妖怪がいるのにどうも思わないわよ」

視界の先には寺子屋に行く途中なのか、子供たちが数人で歩いていた。どうやら日和の隣人に気付いたらしく大きく手を振っている。膝に肘をついて横を見て見ると絵に描いたような笑顔で振り返していた。

「……あなたはあなたなりに人と妖怪のことを考えてくれた」

「まぁ、そうさな」

「ご馳走さま。またたかりにくるわ」

傲慢に一度も口をつけていない茶も飲み干すと席を立った。
「ーー任せなさい。幻想郷のことは、私がやってあげるから」
「かかか、そりゃあ安心だ」

里に奇妙な妖がいた。
男は紺色の羽織にいつも首に高山笠をかけ、煙管を蒸かしながら歩いていた。それの風来坊姿から最初は流れの人間だと思われていたが、ついぞ妖者だとばれてしまう。だの里人は男を避けられる事なくまるで同じ人間だと言わんだけに笑い合った。水場に寄るので女と世間話を、酒を交わすので男と笑い合った。
しかし里人には知らないことがあった。男が何の妖かである。角が無いので鬼とは言えなく、羽が無いので天狗とも言えい。それでも皿があるかと問われるなら河童ではないのだろう。里人は言った、男は男。妖からもつままれたおかしなお方なのだろうと。なんとなく酒の席で話を男に伝えられると、男もそうだと言って笑った。男は妖だの好きなのは人間だ。人間が笑って騒いでいるのを見る、鼻摘まれ者なんだ。
月が明るく薄騒めく、雲間に妖が行く。かつて船頭に立ち舵を取った男はもういい。何は、
今は昔の百鬼夜行
で、あるからだ。